Sep 1899
No. 486

明治三十二年四月二十五日

女學雜誌

第四百八拾六號

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

第四百八十六號目次

◎社説
外國人何の爲に來遊するか
當代の腐敗何かあらん
支那の爲に憂ふるを止めよ
◎女學
近松女氣質
（第四）戀八卦柱暦のおさん。。。　櫻井鷗村
卒業の女學生に告ぐ　青柳有美
誤り易き女學論
校内無覺の感化
◎評論
惡人心理學
藤村子の詩
福音新報記者の海舟先生評　青柳有美
◎教育
小學校舍及教員の不足◎美育の欠乏（東根）
◎雜録
小説鉏線（無名氏）◎新体詩「わかれ」（花影）
◎寄書
十六夜日記を讀む（淺野すゞ子）
◎時事
時事新報の女學論◎學生品行の墮落
◎教育家と藝妓
◎新刊書誌
◎片々
◎時報
◎附錄
海舟餘波（批評第一集）

社告

◎本誌は毎月二回即ち十日、二十五日の兩日を以て發行す
◎十日發行の分は稍や平易實際の記事を專にし、第一、家庭の整理改善に益あるべき事項を主として、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを置き、二十五日發行の分は、女學宗教及び教育等に對する吾黨の卑見を陳述し、大に世上君子に問はんとするを旨とす。
◎單に十日發行の分のみ又は廿五日發行の分のみを指定して所望せらるるものあらば其の需めに應ずべし

●女學雜誌定價表●

前金	壹冊定價	拾錢
	半年分定價	壹圓拾錢
	一年分定價	貳圓拾錢
	（内國無郵税）	
	代金は總て前金にて御注文ありたし◎年來引續購讀の諸君にて前金切れ候共御斷無之間は引續き發送するも可有之事　但し其節は總て一冊十錢の割にて計算し追て請求可致事	
廣告料	一行（廿五字詰）一回	前金拾錢
	同　三回以上	一割引
	同　六回以上	二割引
送金	送金は東京駒込郵便支局に宛て小爲替にせられたし郵便切手にて送らるる人は總べて一割增にて計算せられたし	

明治三十二年四月廿四日印刷
明治三十二年四月廿五日發行
發行兼編輯人　巖本善治
印刷人　布川孫市
東京府北豐島郡巣鴨村字庚申塚二百四十六番地
發行所　女學雜誌社
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場
（電話本局十九番）

◎婦人科 ◎小兒科 專門　至誠醫院治療之趣旨

本邦婦女の特性として温柔靜肅を旨とし閨門深く垂れ籠めて猥りに人に接はらぬを良家の庭訓となすが故に男子とは席を同ふし語を交すをさへ道に缺くるものとし扱るべき病症殊に子宮疾患の如きは醫に就くを羞ぢ厭ふが爲めに唯密かに心を痛め身を苦しめ終には人生の快樂を殺ぎ子孫の繁榮を遮ぎり天壽を天折するもの尠なからず豈嘆かはしき至ならずや　本院長も又是國風の間に人となり深く此弊を憂へ之を救ふの道もがなと慨然婦女の分として宏りに身を挺んで尊榮にして深邃なる醫學に志し研鑚多年その業を卒へ爾來又た數年東西の諸大家に就きて特に婦人科を研究して刀圭に從事する所以のものは己れ女性に生れたるの天職たるを信じて呢み近づき易く打ち解け語らひ易き同胞姉妹の疾患に對しては能く貞淑の美徳を傷けず愼重懇切に治療し得るは竊かに諸大家に讓らざるの特技あるを期す又小兒科に在りては第二の慈母として狎れ懐き易きが故に幼兒をして扱ち怯れ失聲啼泣せしむるが如きことなく安靜に診療を施し得るを以て誤診姑息等の弊なしとす是れ　本院長　が起ちて世の同胞に告ぐる所以なり

院長女醫鷲山彌生診察　本院午前　分院午后

本院麹町區飯田町四丁目九番地
分院京橋區宗十郎町二番地
至誠醫院

女學雜誌

第四百八拾六號

明治三十二年四月二十五日發兌

社說

外國人何の爲に來遊する

世界の放埒者相ひ語りて曰く、既にパリーの遊蕩に厭き果てたり、いざや、日本に行かんと。其の日本に來るは、風光の明媚を愛するが爲めか、山河の清香に醉はんが爲めか。否な、手當り放題に花を折らんが爲なり。在留せる外國人中の氣慨あるものは曰く、彼等外國人の貴國に來るは放埒の爲め也、其の本國の交際社會に猫の面を冠りて究屈に堪へず、本來の獸慾を滿たさんが爲めに、此の寛弘圖鹵なる樂園地に來ると。海外の士、亦歎じて曰く、世界の醜業婦中尤とも、佳きは日本人なり、他は專ぱら錢の爲めにす、日本婦人は稍や情を混ずれば也と。

夫れ、斯の如き評判は、帝國の譽れなるか。斯の如き寛仁大度は、帝國の雅量なるか。斯の如き野卑なる情愛は、日本婦人の優美なる乎、敢て肅しんで問へ。

夫れ、外國人の汚らわしきや久し。彼等巧みに外面を虛飾し、文明の狐皮を着し、紳士貴婦人の稱を冒して、獨り自から開化せりとなす。豈に圖らんや、其の夫婦間の亂雜なる、其の姦通の夥たゞしき、天下、鼓を鳴らして痛罵するの實到る處ろに充てり。而して、彼等が獨り自から文明と稱する所以は、其の虛飾の老猾なるが爲め也。大道に對して、公明に問ふ。

凡そ純潔の事、日本豈に彼等の下に立つものならんや。而して、日本の今ま如斯き醜名を天下に負ふ所以のものは、其の公德の圖鹵にして、交道の疎漫なるが爲めのみ。此時、實際亂行の多少厚薄を比較して、強いて安んずる如きは、小兒の事なり。事實に於て、外國人の續々として來遊する主旨の過半は即はち此事の爲なりとせば、吾等帝國の民たるもの

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

安くんぞ、自から辨じて特更に安慰すべけんや。彼等、吾姉妹を目して女郎となし、吾山河を見て遊廓とし、其の狐皮を脫し、虛面を剝いで、神洲の地に氣樂の放逸を爲さんとす。帝國の民は、如斯き外來人を珍客として、之を內地雜居の一利益となさんとする乎。

嗚呼、文明の三分の二は虛飾なり。西洋人の品行の過半は、交際の爲め也。今や、彼等は、其窮屈より逃れ、我帝國に於て當座の保養をせんとす。彼等は此國を温泉場と心得、勝手氣儘の遊びを爲さんとする也。日本人は、其の散財を頂戴して、感謝して外貨輸入の賜物とする乎。

夫れ、毒は毒を以て制し、下等人物は、下等の手段を以て制裁すべし。彼等外國人を驚ろかせ、其の僞善心の取締を爲すの方、唯だ一のみ。他なし、彼等が脫がんとする狐皮を脫がせず、彼等が剝がんとする虛面を剝がせず、詮方なくして依然、紳士貴婦人の躰面を維持せしめ、文明人として通用する丈のメツキを其儘に保存するの方唯これ也。凡そ、メツキの到底正金たらざる以上は、之を正金となさんとするは、徒勞なり。暫らく先つ其の虛色を保存せしむる丈にて可也。

其方、盛んに、內外人懇親會を催ふし、双互の交際を起し、大に英文雜誌を盛んにして、其の記事を天下に公けにし、而して、不埒なる外國人を此の交際場より退ぞけ、又、其名を吹聽して顏色なからしむべし。之が餘波としての一利益は、かの下等にして而も紳士の名を冠ふり居る今の多くの不品行男子の如きが、此點のみは西洋流の筆法に倣つて、少しくは其の亂行を秘するに至らんと也。之れ彼等に望むべき唯一の改良法也。見よ、此の一方行れて、二面の効果あり。內外ともに見榮坊の奴を驚ろかし、少しくは其品行を謹しませ、以て悪德の流布を多少減殺すべし。以て、彼の無邪氣なるものを汚し、未通見なるものを迷はし、自由八方に、パチルスを蔓延するとを幾分にても制限するの効はあるべし。

故に曰ふ、內地雜居の準備中、實地にして且つ効益あるものの一は、唯此類のみと。其他豈に別段の影響あらんや。

春朝　　四升子

蝶はまたれふれる花の梢よりしらみそめても明る空哉

夕春雨

夕霞小さめさなりて青柳のいとしつかにもくるゝそら哉

花の歌の中

たききおふをちもゆききになかむらん山路の花はいまさかりなり

當今の腐敗何かあらん

◎方今如何なる社會の人に問ふて見ても、万言一樣の答である。即はち『實に墮落した』『眞とに仕方がない』と云ふの一天張りである。政治家は、政治界の腐敗に落膽し、經濟家は經濟界の亂暴にあきれ果て、宗教家教育家は、切りに慷慨する樣なれども、たゞ慷慨するのみで殆んど悲愴失望の趣むきである。元來、今の世は如何なる情態であるかの問題と、其の情態の果して彼等先覺輩が言ふ如きであるかの問題とは、暫らく措き、既に稍や覺醒して居ると見へる此の人々が斯樣な泣言のみを漏らして居るの事實に據つて、直ちに當世の通弊なるものが歷然として分る。

◎古來の書物を味わつて見るに、何時の世にも、澆季を歎じて居るものがある。其の歎じたる世が、他日亦た羨やまれると云ふ次第で、次に〳〵其の先代を羨やんで居る。人世果して斯く成り下るのみであらば、世は夙くに禽獸世界となつて居るべきである。

◎一躰、時代の風潮は、濱の滿干と同じもので、大抵は只だ同じ所ろを、同じ工合に進退して居る丈けである。國民が理想にせよ、空想にせよ、前途に望をもつて進んでゆく時は、滿潮の如きで、人心狂奔、百事活潑、新業續々として起るの時機である。一旦、回顧、戀舊の氣兆ざして、保守守舊の機運に反れば、宛がら引潮の如きで、人心萎靡、財政困難、百事悉とく不振の形勢に至る。此の何れに偏よりても、人間が左樣に急に變化するものでは無いが、只だ時代の傾向につれて、元氣よくも見へ、又元氣なくも見へ、謹しむやうにも見へ、自他樂の如くにも見へるので、元來、大抵の人間は風船玉の如きに過ないのである。

◎夫故、墮落せり、腐敗せりなどと言つて、夫にのみ屈托する程の價値は無いので、一と度び、世間の彈機に力を加へて、世の風潮のヨリを戻し、人心を爽快に、意氣を斬新に、希望を鮮明にするとが次第〳〵に行はれ來れば、民は亦た忽ちまち一變し、恰かも、昨日の憂を忘れて、今日の屠蘇に醉ふ、元日の春景色の如くなるは、眞とに雜作ないとである。

◎古人の言葉に、先憂後樂とあるが、如何にも經世の慈悲を言ふたものである。世人が無邪氣に樂しんで居る間だに、先

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

づ憂ひて、困難の來る機を外づして置く。而して後ち、世人の樂しめるを見て後で樂しむので、其場に於て世人と同もに狂るひ、而して、他日世人と同もに當惑するなどの不覺悟はあるまじきである。心配事は、一人で心配して人に知らせず樂しみ事は人に樂しませて、其後で之を見て樂しむと云ふが、親にせよ、先覺にせよ、凡そ眞とに他を思ふと云ふ人の爲すべきヿで、所謂ゆる、民をして依らしむるを可とす、知らしむるを不可とするの處である。然るに、自分が慷慨してわざわざ人の安眠して居るものを呼び起し、一處に慷慨させた所ろで、將た何としようとするのである乎。殆んど其の意を得ない。又、世が衰ろへ果て、弱り果てゝ、如何にせんかと途方に暮れたる如き場合は、一處に歎息したりとて何の甲斐がある乎。然るに、當代の志士なるものゝ爲す所は、大率ね只だ此の類ではないかと思はれる。

◎今日、世の情態に向つて歎息ばかりして居るものがある、又、慷慨計りして居るものがある。而して、此方々は、世が急に惡るくなつたよふに思つて居られると見へる。甚はだ不見識の事である。此位の腐り方は、當然の事で、人間が或る時代に於ける一種の變調である。少こし世の趣むきを變へれば、直きに直るので、元より根の深いヿは決して無い。」左すれば、敎化とか敎育とか云ふヿに骨を折らんでも善いのかと問ふ人もあらうが、夫は又誤解だ。吾輩の言ふのは、何も近年に至つて持更、惡るくなつたのではない、初めから相應に惡るいのであると言ふので、其初め少こし善く見へたのも時勢で、今甚だしく惡るく見へるも、又時勢で、此の時勢の工合で、明るく見へ、暗らく見へる所などに拘泥しては成らぬそれは、ホンノ一時の調子であると言ふの主旨である。」

夫故、人性の根本、氣質の土台に對して敎化を施こし、國民を少しづゝでも善くして行ねばならぬと云ふ事は、言ふ迄もなく、必要で、之は又別の問題である。一日も苟且にしては成らぬのである。只但、今日の時勢が、急に惡るくなつた樣に思つて、失望して居る人に、一言したのである。

◎凡そ、世上の人事には、大綱小紀あつて、其の大綱を誤まるときは、如何に小規を振張しても、先々、無益である。即はち、大體を誤まり、大本を覆がへすときは、他に何等忙々焉たる奔走をしても、殆んど無効である。此の大本を立て、

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

大躰を正し、大綱を提さげると云ふが達人の爲すとで、一代に多數あるものでは決して無い。然し、此の達人あつて、無名の大功を何處にか處置しつゝあれば、陰然として、世道正さしく、國歩健やかに、國家は進歩するので、不幸にして、此人なかつせば、世はヂリリ、ヂリリと萎靡して、遂に倒れるのである。多數の人の少々腐れたり、又少々善くなる位の事は、ホンノ、世の調子次第で、國家の基礎に關係すると云ふものでは決してない。

◎今日、西洋人は機先の地歩を占めて居る。文明と云ふ名を横領して居る。兎に角、實際は如何の事あらふとも、既に東洋に先だつて優勢を占めて、東洋は寧ろ受身の姿である。東洋に多少の名論もあり、立派の人もあり、正々堂々たる議論もあるが、要するに受身である。其議論の調子が、いつも辯護、辯解の地歩で、夫丈け既に受身である。而して、受身になれば、力の十分の三は消えて仕舞ふのである。

◎然し、如何なる場合にも、機會の無いとは決して無い。失望自棄するの時の外は、必らず機會があつて、一矢を酬ひ、強敵を倒す場合は幾らもある。夫が爲めには、股をくゞるとも、辱を蒙むるともあらふとも、一心磨滅せずんば、徹せざるとは斷じて無い。何ものも怖るるに足らず、又何ものも賴るに足らず、只だ自から信ぜず、自から忍ばず、自から俟たざる丈けが怖ろしいのである。今に方つて、區々たる小波瀾小腐敗などに屈托して、世事に失望するなどと云ふ氣弱い事のあるべき筈でないのである。

◎經に曰く、麥先づ腐れずんば如何ぞ新らしき芽を出さんと。百姓にしても腐敗物を欠かば、何によつて作物を養はん。昔しは、老子言へらく、善人は不善人の師、不善人は善人の資と。腐敗もと望む可らずとするも、既に腐敗せし以上は幾多の活用手段もある。もし只だ之に怖れては、いつ迄も紛々たる臭氣をかいで、而して、追々其腐敗をひろげるのみで、是こそ實に當惑千万の事である。

（某來り問ふ、閣下が総理さなられなば、誰をお用ひなさる）（今ので澤山サ、誰でもいゝのだ。この方は、初めから、人を更へるさ云ふが大嫌ひだ。どれでも、飼ひ殺しさ云ふのだ。ナニ、根本的改革なごさ云ふのが間違ひだ。お前は今いくつだか知らないが、廿年も廿五年もたつて、それで細君を改革するカイ。ソレ、御覽ナ。改革なごさ云ふからいけない（海舟餘波）

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

支那の爲に憂ふるを止めよ

エルサレムの娘等よ、異方人の爲に歎くとを止めて、但だ自らの爲に泣け」と。天上聲あり、宛がら同一の語を發つて、吾帝國多恨の士に向つて誡告せらるゝものゝ如し。

當今の志士太はだ憂ふ、支那國遠からずして分割せられんと。分割の有無は暫らく別とし、支那分割せられれば、其結果果して如何んと問へ。其憂ふる所、何事ぞ。

支那、行政上に分割せられたりとせよ。而して、支那人は遂に其の外國政府に感化せらるべき人種なる乎。

支那人は依然として支那人なり。而して、其の政府は、文明流の組織により、綱紀を正し、稅法を定め、大に貿易を與起すとせん歟。其の日本に關して、何等の餘響を與ふるや。

或は曰く、支那分割せられなば、其次は日本なりと。憫れむべし、識見は維新前の志士に異ならず。自から知らず、亦他を知らざると、何ぞ甚しきや。

支那分割せられれば、何故に其次が日本なりや。地理の近きを以て言ふ乎。人種の同じきを以て言ふ乎。其の所見。小學生徒が万國地圖を見て掛念するの狀に似たり。

如何なる邦國と雖ども、其の分割せらるるは悲哀なり。之を況んや、友邦善隣の支那國に於てをや、其望む所にあらざるは素より明けし。然りと雖ども、萬一、支那帝國、西洋人に分割せられたりとするも、日本は毫も不利を蒙らず。反つて其の貿易上に於て益する所はあらん。

今や、內地雜居の制を實施し、西洋人と親近密交せんとす。彼等が目睫の間に其所領を新得し、對岸近く相交はるの利、亦素より淺少にあらず。

凡そ、國は、自廢すれば必らず亡ぶ、何んぞ唯だ西洋人の手を假らんや。外國列强と境を近くするの故に危懼するが如きは、抑そも人生進步の活機を辨ぜざる也。

但だ憂ふべきは、憂國の士、事なきに事を生じ、憂なきに憂を釀さんとこれ也。なまじひに、支那の分割に掛念して、無益なる關涉を試ろみ、例の如く、西洋人のお先に使はれて、徒らに犬の如く骨を折り、之より引いて、外國と事を構ふるか、もしくは彌よ人心をして頓挫せしむるか、これ寧ろ在り得べきの憂のみ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

夫れ、假令ひ、支那をして分割せらるゝものとするも、其の憂ふるに足らざること斯の如し。況んや、支那分割の事、豈に容易すく行はるべけんや。西洋もし人物あらば、恐らくは斯、る無益の事をせじ。政治上に空名の權力を得て、餘計の入用を費やし、以て實際に支那人を肥さんとは、識者の爲ざる所ならん。故に、支那分割にしてもし行はるべくば、これ其の好まざる所に出づ。必竟、列强相互の關係の偶然にして產出する所ろ歟。我帝國の之に關わる時、特に尤とも戒心を要するの塲合にあらずや。

夫れ、支那人は、毫も分割論に掛念せずして、只孜々として拮据力勉せり。而して、我國の志士獨り之を頭痛に病めり。頭痛の効果何事ぞ。果然事實に接し、哀然として亦た何事をか思案せんとするや。須からく憂ふるを止めて、自から泣き、他に手出しせずして、足下に勉强せよ。支那人は如何になるとも亡ふることなし。其國の存亡は、古來二十數變せり、何の珍らしきことかあらん。其の都度、帝國に於けるの影響如何と見よ。只唯大抵利益せしのみにはあらずや。而して、今の明治人士、獨り杞憂を抱かんとする也。

女學

近松女氣質

櫻井鷗村

(其四) 夢にだに戀せぬ中の
戀衣着てこそ濡るれ
戀八卦柱暦のおさん

『から猫が雄猫呼ぶとて、薄化粧する、しほらしや。猫さへも夫ゆゑ忍ぶに、我身は何とから打の綱より解けぬ契ぞや。』爰に京烏丸に、『大經師以春とて、袴いらずの長羽織。家居も京のどうぶくら、諸役御免の門作り』それが妻に、年は十八、名はおさんとて、色香仇なる當世女ぞありける。父は岐阜屋道順とて、七十にも餘つて、堅氣な商人、黒谷の信仰者。おさん、以春とは、稚馴染の中なるが、生得、浮氣の惡性故、心解けぬ契は、うらめしや。恨みこうじて、末遂にあはれなるかな、夢にだに、戀せぬ中の、戀衣、濡れて、浮世に名を流し、書き流したる、近松が、昔暦(戀八卦柱暦の舊名は大經師昔暦)を繰返し、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

世にも哀の物語、人よ聞かずや、其一條。

賢女も、情に過つては、時に不義不貞の浮名を流す。おさんの夫以春に於ける、索より稚馴染の、合ひに合ひては、いとど嬉しき仲なるべきを、稚馴染なればとて、必ずしも、末の末まで、睦まじき語らひあり得べきものに非ず。而も、かゝる仲の常とて、情愛甚だ濃厚ならんとを豫望するものなるに、おさんやこの望、叶ひがたく、以春は、元より放蕩淫逸雇女をさへ相手にせんとするに至りては、妻たるもの、夫を慕ふの念あるが故に、更に、不平ならざるを得んや。

おさんは仲居の玉を相手の徒然話。主婦は夫と契り薄く、仲居は手代の茂兵衛を戀ひて遂げず。共にこれ失望の境涯を、猫に寄せて喞ち、二人ながらに當世女、女同士の譯もなく、好きな男の噂、噂に上るは、いつも、物やはらかで、實躰なる手代茂兵衛なり。玉の言葉に、

茂兵衛のやうな、かりそめに物云ふとも愛想らしく、いつ腹立つ顏も見せず、ほんにあのやうな男持つ女子は果報でござんす。

と、生れてかるたの打ちやうも知らねば、まして、女狂ひもせず、お主大事、商賣大事と心掛け、堅氣至極で、而もやさしき男なれば、女子の愛着を受くる一方ならぬに、身だしなみ強く、玉が『かねてより、茂兵衛に心をかけ、命も捨てんと思ひこむ』眞の戀を盡しても、更に見向きもせねば、戀ひするものは、いよ〳〵辛氣が湧き、賴める主の女房さへ、彼男ならばと譽むるに、愛念ます〳〵熱せざらんや。玉は美しき女、以春は爲に情を動して、一人の妻に飽き足らず、寄るとさはると、口說きかゝり、我が慾心の奴となさんとする、そのいやらしさを、うるさしと嫌ひて、はね付く。以春は、玉が好む人物に非ず。而して女子の好む男は、皆一轍なり。されば、おさんとても、夫よりは、茂兵衛の方を、賴みある男、よき男と常日頃思ひしならん。以春には何となく隔心ありしなるべし、それも、心解けぬ契のゆゑにこそあらめ。

父岐阜屋道順が、借金につまりて、身、これを一期の浮沈、娘に才覺を賴みて、さて、親は堅氣、娘おさんは夫故に以春様に云ふたらば、つい埒は明くけれど、とつ様もかか様も聟に無心云ひかけては、大事の息女にひけが付くと、お年寄の我がつよく、以春様へは鼻息も知らす事が叶はぬ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

助右衛門に云ふならば、又例のしかみ顔、眉間に皺よせて、其足で、以春樣にいふは定、我夫をさしおいて手代にいふは何事ぞ、結句物に尾鰭が付く。

と、苦心に餘つては、兼々賴母しき男と信用せる茂兵衛に、窃に打明けての才覺賴み、賴まれて茂兵衛は、これも主の爲、心は濁らぬと、思案に餘つて智惠足らず、一抔機嫌の安請合、同じ主の印判窃み出して見付けられ、一身の破滅を招いて、友達手代の助右衛門に、踏み付けられる苦痛の中にも、

おさん樣、お袋樣、詫言云ひなど遊ばしたら、未來までのお恨み

と、娘の耻、親の耻を思つて、おさんに義理立て、言譯云はずに、一死を決する處、天晴な心底、おさんはこれを見て、見事立派な男よと思はざるを得じ、況んや日頃心ある玉をや。されば玉は。戀しき男への心中立は此時こそと、罪を身に負ひて、茂兵衛の難を救ひ、またおさんの難義を引受ける、其可憐さ、情愛義理、共に美しとも美しからずや。されど玉が心は全く戀故なり。おさんが『死んでも恩は忘れぬ』と、召使に手を下げて、禮いふに、玉は

是がまあ勿體ない。お禮をうけう覺えも無く、おまへのお賴みなされたやら、どうした分やら存ぜねども、さつきのやうに申せしは、わたしが心有つての事。

と衷情を洩し來れり、

ぢたい私があの人に、骨肉にしみて惚れまして、二年此方くどけども、器量に似合はぬ高尚な、固くろしい偏屈な生れ付き、奉公の內いかな事、女子の手をも握らぬの、女子の顏は明いた目で、見る事もいやぢやのと、愛想づかしばつかりで、やさしい詞も掛けられず、エヽ聞えぬ、きらはれた。にくい／＼と思ふやさき、さつきの難義、見やつたか、玉が罸が當つた。よい氣味とは思ひしが、いや、さうでは無い。恨みといふも戀から起つた憎しみ。戀こそ叶はずとても惚れたは定よ。爰で心底見せいではと、我身を捨てた此玉を、まだ不便とも思やるまいと、ほんに恨めしうござんする。

我が命にかけて、愛を運ぶ人に、嫌はれては、女の苦痛煩悶那計ぞや。いかならん折にか心底見せんと思ふは、其眞情なり。玉が此心、おさんも同情の感に堪へざるべし。これまた飽

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

かぬ語らひに、怨恨せるもの、然るを、玉の以春がわれへの横戀慕、其卑怯至極な心、わが茂兵衛を庇ふに悋氣起して、つら當りする、其事譯を委細に物語るにつけて、はじめて知りしおさんの心中は、熱し來りて、玉、茂兵衛のわれ故に陷りし苦境、實親の難義も、打忘れたらんが如く、

男畜生とは、つれあひ以春殿。女房ひとりまぶッて居る、男とては無けれども、あんまり女房を阿房にした、ふみ付たしかた、涙がこぼれて腹が立つ、

と、夫が己を召使風情に見かへんとしたるを聞知りては、何ぞ情念に狂せざらんや。玉が夫の意に從はざりしをば『今の世の賢女とは、そなたの事』と感謝し、爲に、玉と床換の苦策を案じて、思ふ存分の恨みを夫に述べて、いき耻ぢかゝせ、

さて又、我情の望遂げたしと定めしとは、仇となり、茂兵衛が、玉の日頃の心ざしを感じて、望を遂げさせたしとの眞實心は、計らず、主の女房と密通する奇禍を買ひ、二人ながら、思はぬ戀に、身を陷れて、過はあり、身の潔白は期せども明證し難く、死なんとすれど、おさんは、實親の悲歎に死ぬに死なれず、茂兵衛は、

我ら男の面を下げ、かやうのわざを仕出だし、のめ〲とながらへ在る事も、おさん樣のお命を何とぞと存ずるゆゑ、

その心底。おさんの過失は、以春の惡性にある事を、玉も證し、おさん自からも亦た、

たゞ忘れぬは、二人の親、扨いとしいは、幼なじみの以春樣。こなたも私もみぢん濁らぬ此心、言ひ分して死にたい、

と、親なつかしく、夫戀しき其故に、茂兵衛に連れられて、奥丹波の山里に、隱れ住む、其志は實に憫然至極なり。さりながら、茂兵衛の一人、死んといふを制して、

かたちは生れかはつても、此惡名は削られぬ。其方はいかう狼狽が來たさうな、

といひ、また隱家に忍びて、島原の傾城が受出されて來た、眞似をして、山里に、茂兵衛と、一月二月、夫婦らしき暮しをするなんど、よしや、不義の過は、二度重ねずとするも、いかで、他の疑を晴すべき、いよ〲不義の名を重ぬるのみ。これぞ畢竟するに、おさん如き、當世女の才はあれど情に勝たぬ所業なり、否、嚴乎たる堅志の教練なき女子の事なり。而もまた教育ありとても、女は情の爲には、過つものぞ。おさ

んまたもし、茂兵衞を常々、男の生粋なりと思はずば、いかに過の結果なりとも、かくて一時半刻だにも、夫婦らしく、人に思はれて、死を共にせんと望まんや。夢にだに戀せぬ中、夫以春に見かへまじとは思へども、自覺せぬ中に、戀思髣髴として存せしとなきか。奥丹波の山家に、一つ手鍋より三度の食事を共にして、馴るれば從つて、この髣髴たるもの、次第に、自覺の裡に現出することなかりしか。

さりながら、この柱暦に、多恨詩人が歌ふを聞くものは、おさん、玉の苦胸を思ふて、女子の情愛に於けるや、熱すれば、生命を愛惜せず、狂すれば、不測の過誤を招く所以のもの、瞭々として、之を知つて、哀感を惹起せざるなけん。近松が、この戯曲に於ては、例の如くに、慘死の大團圓を結ぶことなかりしは、東岸和尚の衣の德よりも、世上、觀者の同情を重しとせしが爲なるべし。二人の過誤、何の惡むべき點を有せず。況んやおさんをして、この過ちに陷らしめしものは、罪、以春の、妻を愛すると薄きに由る。女は夫より受くる、愛情を以て、生命の安居となす、おさんの如き生來濃情のものは、特に然り。以春之を知らず、妻に對するの愛を一時のものとして、またこれを、多くの仇し女に分つ、おさんたるもの、焉ぞ、不滿の情に、なほ夫を思ふ一念更に厚く、爲に、熱狂せざらんや。

卒業の女學生に告ぐ

青柳猛

大功は名なく其聲香として聞く可らず。之を聞かんとするは愚者の惑なり。如何なれば今の世は騷ぎ、諸々の民達は擾々として功名の道に是れ走るや。奸惡なる世は休徴を求む。されど預言者ヨナの休徴の外は與へられず。泰山の悠として動かず安として崩えざるは、力なきの故にあらず力のうちに籠ればなり。瀲灔たる漣波の湛たる池の渚によするを見て、活動の新地玆に開かれたりと云ふを止めよ。勇士の起き現はるゝこと多きは、天下の吉兆にあらず。戰の聲東に聞え、角笛の音西に響く。相打ち相迫まり遂に共に同に斃ふれずんば幸なり。

夫れ學問の要は力を養ふにあり。動と靜とは其態なり。必らずしも問ふ處にあらず。之を譬ふれば動は陽なり靜は陰なり。陰陽其序なりて天地始めて完し。女人は陰なり。須らく靜なる

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

べし。預言者三日三夜魚の腹中に葬らるれば、ニチベの市は麻を着灰を被むるに至る。徒らに休徴を索めて及ばざる如きは、禍の源ならん哉。今の學に志すもの、病苦誠に玆にあり。怖れざる可けんや。纖姸たる櫻花其色華やかなりと雖も、其職や靜にして陰なるにあり。大架の棟梁たるべからず。春の百鳥、野邊の秋草、一見用なきが如くにして實は大に用あり。天地之が爲めに住ふべし。女人の用は即ち是れにして所謂位母のエネルギーたれば即ち足る。其力は用ゐんが爲めにあらずして傳へんが爲めなり、それ凡て傳ふるものは受けざる可らず。生物遺傳の大法は天の妙法なり。自ら受ること薄くして、子孫の腦力如何でか銳利なるを得ん。是れ女子敎育あるの所因なり。他あらず。故に以爲らく、女人の學ぶは活動勇飛の故に非らずして、後代に傳へんが爲めに備ふるなりと。今日校を出るの諸子に此心ありて世に臨まば、不平痛恨の念、其一分を減じ、長久に榮えを學識の名に歸するを得んか。夫、世界は大學校なり困苦は吾儕に勝る良師友なり。就て益々多く受け謹て拜謝せよと云爾。

誤易き女學論

通常、誤り易き女學論は、大抵其の種定まれり。古今同一徹、先後たゞ同じき筆法の辯論の外なきゆえに、試みに其の在觸れたる誤謬に對して、簡短に答論すべし。

一　女子敎育の主義を一定せんと云ふものあり。

是れ、敎育の道に精はしからざるが故に、斯の如き空論あるなり。凡そ敎育なるものに何等の主義ありやと問へ。完全なる敎育には、敎育主義と云ふものの外に、主義あるとなし。或は曰く、個人主義の敎育、或は曰く、國家主義の敎育と。斯の如きは、たゞ空論にして、實際に何等の差別あるとなし、元と差別あり得べきものにあらざる也。此輩の徒、亦た、女子敎育に對して、家庭主義、職業主義、高等敎育主義などの別ありと思惟する也。元と、敎育の實際に當りて、人を敎育するとに試みざるが故の空論たる耳。凡そ敎育に何等別種の主義あらんや。別主義あるも何ぞ能く行はるるとあらんや。

二　女子の本分を預定せんとするものあり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女子は斯々あるべきもの也と豫定し、此の豫定を標準として一般女性を教育せんとす。之れ開發教育の主旨をすら知らざるもの也。男子は斯々あるべきものなりと一概に豫定し、之に向つて万人一律の教育を施こし得べしとする乎、人性教育の道を知らざるも亦甚しからずや。斯の如きは、女子を教育せんとするの問題にあらず、女子を如何に男子の好尚に適せしめんとするやの問題なり。

三　女子の本分を家庭とし家庭の事のみを教えんとす

是れ家庭の主婦たるにすら不十分たらしむる拙劣の識見なり

天下に和して、國康かるべし、國に同じて、家安かるべし。能く一家を治むるは、先づ一國の事を知るあるの故にあらずや。戸々の家庭、もし茫々たる原頭に存し、絶へて國勢と相關せざれば止む。苟くも、社會の大環中に存すとせば、亦是れ社會を知るにあらずして、如何でよく一家を維持せんや。左れば、本分、家庭にあるの故に、家庭以外の事に不案内なるも可なりとするは、活社會の連關を知らざるの愚なり。

四　生意氣を氣にするもの

女學生の生意氣、教育ある婦人の生意氣など唱へて、切りに攻撃するものは、暫らく、彼の百姓議員、町人政治家などの昔し一言もお上の事に喙を容るる能はざりし族が、方今堂々として國政を議する風采の如何に生意氣らしきやに一顧せよ。智識あり、意見あり、主張あるを生意氣とする乎。其の發言の躰裁、言葉づきの樣姿に一風あるを生意氣とする乎。好々唯々として何事にも屈從せし風儀の失せしを生意氣とする乎。試みに仔細に省りみて、其の果して生意氣と云ふに足るかを思へ、之を生意氣として女學全躰の進歩を中止するの理由あるかを思へ。

五　女子に高等の教育を不必要とするもの

何故に不必要と斷言し得る乎。人の教育は只だ麵包の爲めか、只だ工藝實用の爲か。人間頭腦あり、智識を渇望し、自から研究を要求するとき、其の女なるが故に高等教育を不用なりと斷定し得る全能は、男子如何にして天より得たる。

六　女子の教育は其の身躰の發育に害ありと云ふもの

發育に害ある如き教育は、善き教育にあらざる也、女子教育の希望にあらざる也。何故に、發育に害あるほどの教育を女學が切要すと云ふ乎。而して、發育に害なきほどの教育は、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

其の女なるが故に施こされがたしと云ふ乎。殆んど論ずるの價値なき論題なり。
凡そ如斯き類は、其の尤とも普通にして、尤とも愚なるもの也。倘ほ其の復雜なるものに就て、他日次第に論ぜん。

校内無覺の感化

附燒刄は剝げ易く、理屈の附合は密着しがたし。理道を耳に聞きて、口さきに議論の道理を唱ふるのみにては、其人自得の道にあらず、實地の品德に所詮は効なきものなり。左れば、知らず識らず化せられたる行狀は、亦た知らず識らず實行す、斯くして眞との品行と云ふものあり。教育に感化を重んずる由縁は、此のわけありて也。
婦人終生戸庭に役々として、一年三百六十五日、たゞ辛氣くさき一樣の仕事を爲すの折、もと大志を懷き空想を築きたるほどの女學生には、耐えがたきほどの倦厭を生じ、不平鬱結して偶たま面白からぬ病をも引出すとのあるもの也。女の野心は男の如く甚しからず、事を好み、名を好むなどの僻は元と少なき方なれど、さりとて倘ほ清淨無垢にはあらず。折折の空しき羨やみ、徒らなる多恨、豈に盡くるの期あらんや。庭前戸内、人知らぬ物思ひの此般憂き事にさまよふ折節は數數なるべし。
之をして安んぜしめ、之をして別に慰さみを得せしむる、種種の道あるべきなれど、生平校内に於て得たる自然の感化の之を薰するものありて、知らず識らず自から分に安んずるの素養を存せざれば能はず。仕事に大小の差別なく、立功に僥倖の仕合と云ふものなく、人は其誠を盡し、其の伎倆を盡したる相應に、何處にありても當然の結果あるよしを深く思ひしめなんと肝要なり。人此の覺悟に落付かざる間は平和なし。平和なきの盡力は騷ぎに似て結果を樂しむを得ず。終生只だ役々として心煩はしく、遂に身相應の慰さめをすら懷くと能はず。殊に婦女子に於て然り。
左れば、學生をして斯る煩悶に陷いらしめず、常に分に安んじ、時に從ひて平らかに思ひ、其の責任を盡して功の大小に掛念せざるほどの自得あらしめんには、其の敎ゆるものの先づ其敎職に自得し、其の責任に安慰し、其の野心なく、其の空

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

望なく、其煩悶なく、茅屋の小き教室にも晏如として天地人生に和樂するの餘裕實際に顯現し、其感化校内に活動して、知らず識らず女生を薫化するにあらざれば能わず。教師未だ其道に安んぜざるに、子弟何すれぞ其任に安ずるの良習慣を感得せんや。

此故に、野心あり、自任なき教育の下には、之に似たる學生を出さん。徒らに出世を貪ぼり、現在の地位に安んぜざる如き學生は、其の天職に甘んぜざる教師の下に生長するにやあらん。故に、他日主婦をして其の家庭に滿足せしめ、滿足の中、生氣ありて、爽快に之に安慰するほどの自得あらしめんには、之が養成の學校内に於て先づ其の感化充滿せざる可らず。而して之あらしむるものは教師自己其の天職に忠に、之に安んじ、之に謹嚴の抱負あるより初まる。凡そ先づ此の播種なくして、如何んぞ他日良好の結果を得んや。

○女學雜誌　第四百八十四號
社說「理勢論」は奇警人を刺すが如き中に又た清麗の妙致あり「海舟餘波公版の微意」又た一掬の清涙を見る。評論、雜錄、隨感等洒然として一貫の氣品を認むるは本誌の特色なるべきか（藝備日々新聞四月八日）

評論

惡人心理學

一片道義の規律は何人か能く之を定むる。漠然として裁斷するものあり、曰く、善人。曰く、惡人と。抑そも、何ものか是れ善、何ものか是れ惡、轉たゝ人をして矯激せしむ。

其の觀る所、深酷。其の覺悟する所、勇決。大抵、一義に執熱して、名聞に懼慮するなく、只猛然として烈情の迸ばしる所に奔る。其の行爲、斯の如くして常規に外るるが故に、則はち宣告して、惡人となす。惡人なるもの、大率ね、只斯の如くして生ず。

所云ゆる惡人に就て仔細に考ふるに、彼は先づ僞善者にあらず。假令ひ善を僞はるの必要ありとするも、其の手段豪烈、一種の蠻勇を存す、曲折して而も卑怯なる醜態は、其の甘んぜざる所ろ也。彼は亦た詐僞者にあらず、詐僞を爲すには少しく疎鹵にして、其の用心に依賴せんには餘まり亂暴なり、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

彼は隱忍して遂に詐僞せんよりは、直ちに之を橫奪せんとを欲するならん。彼は血に渴き、血を見て樂しむ。慘虐なりと雖ども、寧ろ之れ熱情の變態にして、別に可憐溫柔の淚あり。時として其の全身を與ふるの際に灑ぐ。此淚容易に下らず、下れば熱湯をなす、彼の才人貴女の淚には似ざる也。

惡人の惡を爲すや、寧しろ自然なり。大抵、自から疚しとせず。但だ流星の暗夜に走るが如く、身は是れ光明なきの地に苦鬪すべきものと意へり。彼未だ溫たかき慈愛に接せず、自から慈愛の尊ときとを知らざる也、安くんぞ大悲の道を味わんや。世人皆な之を惡み、光明亦之を容れず。彼は其の境涯にあつて相當の處行を爲せり、而して、人は呼んで曰く、大惡人と。彼は、惡人の惡たる所以を知ると能はず。

彼素と機轉の才にあらず、豈に容易すく頸骨を曲げんや、一と度び方向を决して進むとき、頑然として回へる能はす、彼は其の運行の儘に惡界に突入せり、而して、世人は痛罵して之を退くるのみ。彼が其の决する所に向つて進むや、眞摯にして熱烈なり。素と身命を惜しまず。如何んぞ名聞をや。其の斷然として猛進するや、光采眞に陸離、彼の調和軟從の二三子と同じからず。抑そも何れか善なるや。

文明の君子、彼等の爲に監獄を改良し、彼等の爲に敎誨を施こす。其意、彼等を憫れむとある也。然れども、余は惟ふ、世人は彼等を憫れむに先だつて、先づ彼等に拂はざる可らざるものあり。彼等稱えられて、惡人たり。其の惡なるもの、果して惡か。豈に意はんや、世人、惡人者の心理を知らず、只だ常例に違へるの故を以て宣告して惡となすとの多きを。所云ゆる惡人に其敎誨師より善きものあらん。世人暴りに之を憫れむべからず、先づ之に向つて償はざる可らざる也。

嗚呼、人間裁判の不完全なる、一に何んぞ斯の如く甚しきや。在監の囚人中、其刑に相當せるもの果して幾何ぞ。社會は之を罵しるに先だちて先づ謝すべし。罪人を造るとの尤とも多き者は孰ぞ。之を裁判するの徒大に責を負はざる可らず。悲しひ哉、人間、其の愚なるにより、狹なるにより、我なるにより、互ひに相ひ陷いる。斯の如くして、常識に外れ、一偏に僻し、實は正直にして、行爲の圓滑ならざるもの、屢は困しめらる。監獄に繋せらるるの理由なきものと、聖坐に立つの價値なきものと、何れか多き。人生眞とに亂脈、人容易

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

すく、世の裁判を妄信する莫れ。幾多可憐の子、彼の鐵窓の内に苦吟す。余は監獄改良に先だちて、惡人心理學の大に講究せられんことを要むるもの也。

藤村子詩

青柳有美

●藤村の、明治の新躰詩に於けるや、猶ほ德富蘇峯の、明治の文に於けるが如しといはんか。その歌ふところ自ら一種の魔力あり、新詩に志ある當世の子弟を率て、概ねその體を學ぶに至らしむ。嘗て蘇峯の文が、當代の靑年を風靡せし如く、今や『藤村調』なるもの、其勢ひ頗る靑年新詩家の間に隆んなり。新進の作者にして、其臭ひを帶びざるもの、殆んどこれなし。かの鐵幹の作さへ、近頃稍々蔦葉の調を荷ひ來りて、所謂『藤村調』にかぶれたる如き色あるをかし。

●サンフランシスコのハリスなる人、內村鑑三氏に書を送りて『卿の文は、之を切れば、鮮血迸る』といへり。されど、鑑三氏の文を切りて出るものは、芝居の役者などが、腹掻き切りて流すか、將た手品師の脇など、槍の尖にて突けば、雨の如くに流れ出る洋紅液のたぐひにてもあるべし。されど、藤村の詩を切らば、かゝる類ならざる眞の血液迸るべく、腥風鼻を衝て觀る人の眼、あはれならん。『おくめ』など、殊に然なり。

●藤村の詩の、明治の文壇に出でたるは、假令へば、バイロンの詩の、英吉利に出で、ゲーテの『若きウエルテルの煩ひ』が、十八世紀の末に現はれたるが如し、古より戀の歌題はあり、されど眞に戀を歌へるものなし。もしこれありとするも、こは封建の戀、殿上の戀を歌へるものなり。歐西の文明と共に、歐西の新戀愛も、又來りて、我が靑年の心に入り、其攪亂を蒙りて悶絶苦絶、七顛八倒の惱みあるもの多し。而して之がために淚を以て歌ふ詩人なく、愈々戀の軛に泣かんとするもの相增さんとする時、藤村出でゝ此の歐西舶載の新戀愛を歌ひ、その悶絶者の淚をぬぐへり。然らば藤村は是れ情海の救主の如く、大旱の雲霓の如し。之を妊娠論の賣れ口よきに比するは、大に酷ならずや。

●世間、藤村が戀愛を歌ふを稱すれども、その能く天才の不遇を歌ふものあるに、氣付かざるが如し。『いま前の世は鷲の身の處女にあまる羽翼かな』と歌へる『おきぬ』は『猛鷲ながら人の身の天と地とに迷ひゐる身』にて、明に天才の士の、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

世と考ふるところを異にして、煩悶苦絶する樣を畫き出し、萬斛の涙を之がために注げるものなり。『天馬』も亦曰く、天才の士人が、この塵の世に生れ來て、其道德其理學などに心を安しとする能はず、しきりに飽き足らぬ思のせられて、或は高踏し或は厭世悲歌の境に沈むを歌ひたるに似たり。『雄馬』は高踏派なり。故に曰く『天の雄馬のすがたをば誰かは思ひ誰か知る』と。『牡馬』は悲觀派なり。故に曰く『湧ける泉を飲み干すも天の牡馬のかぎりなき渇ける口をなにかせむ』と。何ぞ悲しき。

●藤村の詩は、朦朧躰なり、解し難しといふ人多し。されど、これはエマルソンの文章などが、應々解し難しとの譏あるに同く、之を要するに、頗る推考鍛煉せらるゝことの厚ければなるべし。凡て鍛煉せらるゝこと多ければ、作者初發の思想の變形せらるゝことも、隨て多く、之に推考を加へたる作者は、自らよくその變遷の經過を知ると雖ども、突然之を見たる讀者は、その詩の眞意何れにありて、何を歌へるものなるやを推測するに苦み、手を拱て『解し難し』と言はざるを得ざるべし。されば、これ作者の罪に非ずして、讀者の想像の及ばざるなり。加ふるに朦朧は美術本來の特質なるを。

●晩翠の詩は、假令は英の詩人ポープの如きものなり。もしポープの如くならずといふも、餘りに西洋臭しといはんか。其の詩中に於て、常に哲學論めけるものを喃々せんとするは、以ての外といふべし。あやしき理屈は、我れ之を詩に聞かんことを欲せず。願ふは感激せんことなり。晩翠の如き理屈は敢て晩翠の詩を待つに及ぶまじ。ポープの詩人として失敗せるは、その怪しき理屈にあり。世人、徃々、藤村晩翠と並び稱す。されど、藤村の晩翠に上ること數等なるはいふまでもなし。近頃『天地有情』なるもの出でたれど、『若菜集』などゝは、殆んど比べものにならず。しかはあれど、藤村とて『夏草』にては、題目の乏しくなりしと共に、稍々この弊に陷りかけて、いやに舶來の學者くさき形跡、少からず。注意すべきことなり。

●藤村は耶蘇學校出のこととて、詩人として其名をなすに頗る不便なる位置にありしものゝ如し。こゝに至れば、大學出の詩人共は、頗る好都合のものにて、連中各々各種の方面に陣を据ゑ、吹聽の交換をなし、聲を高くして互に賞めあひ、天下に其名をなすに至るなり。晩翠の近頃不相應なる評判あるも之がためにて、桂月羽衣などの類は、日本狹しと雖ども、腐るほどあるべく『うらにしき』の枯柳など、相應の技量あ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

れど一言も持てはやすものなし。藤村の世間に評判高くなりしも、大學派と交を結ぶに至れる後の如し。

『雞』は、その想はハムレットより脫化せるものに非る乎。夫の弟に欺かれて、夫の死後直に思ひをそれに引かされし女王ゲルトルードは、雄雞の見しらぬ雞と爭へる間は、恐れ隱れしが、一たび雄雞の斃さるゝや『よりそふごとくかく敵になるとはなしに身を寄せし妻鳥』と寸毫の差違だもあらざるなり。たゞ女人の妻鳥となれるのみ。『おつた』なども、スコットが『湖上之佳人』第六齣第五節の『兵士の歌』などより胚胎せしと思ふ節なきにあらず。此くの如くにして、想を洋詩に取れるものも少からず。

●藤村は、其詩集の卷を重ぬるに隨て、所謂痴態を脫し、優に光明を歌はんと勉むるものゝ如し。『夏草』なる『農夫』が結句のほとりなど、まさに其色を見るべく、これ『若菜集』の作者と同一の筆にあるかを疑はしむるほどなり。物凡て痴態なくんば、面白味少し。藤村の詩が、その痴態を減ずるは、其面白味を減ずる所以なり。毒は毒を救ひ、痴態は痴態を救ふ。我儕は、藤村の詩に說敎を聞かんとはせず、慰めを受けんとはするなり。願くは、バイロンの如く、其痴態を永遠に續けよ。

●また卷を重ぬるに隨て、わざとらしきところあり、詩を作らんがために詩を作れるが如きこと多くて、腹たゞしき心地す。もし首を左右にひねらずば、新らしき詩想詩形の浮び來らずとなれば、暫時該業を罷めて小說家となるをよしとす。かの『農夫』の如きは、之を韻文にせるが故に、却て調に責められ、運動自由ならず、其妙味を損ねたる氣味あり。折角出で來らんとせる涙まで、途中に遮りとめらるゝの恨みあれ。通讀するに、之を韻文とせるは無類の無理にて『農夫』＝恠しき『涙痕集』―平家物語とでも、言ひたき思ひす。殊には、その筆頭より、燈の油のことなど書きたて、『一の聲』『二の聲』まで置き、徹頭徹尾バイロンがマンフレッドの形をうつせし如しと雖とも、まだ〳〵舶來臭くて、いやらし。

●藤村の詩形は、恰もかのスペンセリヤン、スタンザに彷彿たりとも見るべき、七々の調を以て、段節の終となすことに於て、最もよく成効せるものゝ如し。この體の秀でたるは『一葉舟』なる『春やいづこ』にありとす。バイロンの如きも、頗る好んでスペンセリヤン、スタンザを取れることなれば、藤村にして此上益々この七々終閉調に功を積まば、天晴れ面

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

白き『藤村體』をなすに至らんか。

●藤村の散文は、如何にかと人の危むものもあれど『一葉舟』のうちなる『春詞』の如きは、當世文士のうちにも、美妙齋子を除きては、仲々に追ひつき得るもの、少なかるべし。但し、散文詩の言文一致躰は好ましきことにあらず。兎も角も我れは藤村を以て、過去現在の新躰詩家中の第一位に押さん。歐洲語を解せずして、歐西の詩を解せんとする人は、藤村の詩集三册讀まば、大抵は其消息に通すべく『若菜集』の『傘のうち』など、バイロンとて其上に出る能はざるべく、我が好むところは、之を第一とし、次を『別離』次を『六人の女』次を『春やいづこに』などとす。

福音新報記者の海舟先生評

福音新報記者が『海舟餘波』を評せし言の中に云く、

海舟は偉大なる人物なるか、將た斗筲の小人なるか。此は人々の、各其の觀る所に由て意見を異にする所なり。海舟果して富士か八島か朝日の如くならば、其餘波も激して磯を打ち岩を嚙まん。彼若し三四反の帆にて走る小舟にもあらんには、宿蟹の殼をも動かし得じ。

是れ、『海舟餘波』の評にあらずして、寧ろ海舟先生の人物評なり。元來、渠福音新報記者が、海舟先生に對して如何の意見を有するやを知らずと雖ども、此文の語氣の如き、抑そも慈愛の宗教を信じ、且つ傳道の聖職を奉ずるの徒が、福音と題する新誌の上にて公言するに適當せるものか。本來、渠記者の言行に對しては、痛酷なる論難を與ふべき理由あれども、久しく之を恕せり、今や遂に止を得ざるもの歟。記者もし海舟先生を目して小人と評し得べき論據あらば、公々然として之を其紙上に列擧せよ、余輩は一々之に對して辯論すべし。而して、小人とは果して如何の徒なるやの實證を、現に記者の親しく承知せる實歷中に於て指示すべし。夫れ、文章は千古の事なり、純白の紙に對して、賊黑の字を畫き、一々眞情を披瀝す。記者が軟骨向迎の門下生、もしくは、暫らく寛假して閑棄に爲し置く一席の座上にて空談するものとは異なるを知れ。從來福音新報などを相手にせしとはなし。然し乍ら、事、余輩の師事するものに關す。凡そ辯ずべきものは之を辯ぜざるを得ざると知れ。

教育

教育界時感

東根學人

◎小學校舍及敎員の不足

小學校々舍並びに其敎員の不足なるは、世人の普ねく知る所なるが、曩に衆議院より敎育に關する質問に對し、政府の答辯せる所を見よ、

明治三十年末の調査によれば全國小學校に於て要すべき本科正敎員中三万有餘人の不足あり准敎員を以て之を補ふも尙ほ一万三千有餘人の不足あることは質問書に云へるが如し而して其正敎員及准敎員を缺ける小學校の授業は概ね無資格の雇敎員をして擔任せしむる實況なり

と、而して此敎員の缺乏を補充せん爲め、政府は師範學校生徒の定員を増加し又敎員講習科を增設せし所あるも、未だ其目的を達するに足らざるを以て、其方法に付き目下調査中に屬すとなり。彼の退隱料扶助料等に關する改正法律案通過して、愈來る四月一日より施行することとなりし如き、從來に比して小學敎員の得る所大なれば、少なからぬ影響を與ふべし之れ待遇法の一法として吾人の慶賀する所たり。

小學敎員の特典として退隱料、扶助料の給與は從來とても之れありしにて、唯來月より施行するは從前の比にあらざる寛典なるを注目すべし、余輩惟ふに今日小學敎員の不足なるは給料少なく待遇厚からざるは素より最大の原因たりと雖も、一に之を師範學校卒業の男子に需めて、女子部に對することの冷淡なるは亦其因なるべしと信ず、換言すれば女敎師奬勵を一層高めざるは誤れり、又師範學校卒業者に非れば、正敎員とせず、或は准と云ひ、或は無資格と云ひ、一般に官學臭味を存するは亦之れ一因たり、資格とは何者ぞ、師範卒業と試驗合格との二者によりて定まるものなるべし、而かも此二者によらざるもの皆實力なきものに非ず、地方の事情に通ずるものは夫々の便宜を以て、種々の敎員を採用すること難からざるなり、然るに今日は師範卒業者等跋扈して、彼等獨り敎員の正當なるものと信じ、他は或る試驗の合格者に過ぎずと冷視し若しくは雇者と輕蔑するの風あるが爲めに、隱然派を爲すの狀、之れ容易に他より得難き所以の一なり、必すしも世人が普通敎育を輕視し、冷遇するに非ず、從來の敎員其者に已に

官學臭味の拔べからざる醜念存するが爲めなり、恰も高等師範と大學派との地方中學校師範校に軋轢ずるが如し、三万餘人の正敎員不足すとは、師範卒業、敎員講習科卒業者の不足を意味するのみ。實際上不足なるに非ずして、官學的、形式的のもの不足なるなり。

斯の如くなれば、世に職工敎育と云ひ幼少の勞働者に小學程度を課するの必要を唱へ、大いに其設備を論ずるも、先つ以上の敎師不足、校舍不足の點より見されば、徒らに叫ぶのみにして實施せしむると難からん。

小學校の校舍、敎員の多きは、太た喜ぶべく、三万餘人の不足あるは嘆すべしと雖も、今の論者は學齡兒童が幾人あるか故に學校は幾棟なかるべからす、之を滿足に敎ふるに幾人の敎員を要すとの一天張りに止まり、公立に非さるものは僅かに代用なれば、不完全なり不充分なりと攻擊し、新たに公立を增設せよと叫ぶ、殆んど兒戯の如し、知らずや貧民敎育の如き當局者未だ一指だも染めず、其設計せざる前に於て、有志は細々ながら之を實施して、社會を利しつゝあるを、公立の敎員が代用を輕視し、又は私立を冷嘲するも、公立よりも

更らに着實の敎授を爲すもの少なきにあらざるなり、增設は可なり、公立に非れば學校ならざる如く思惟するに至りては陋なり。

◎美育の缺乏

所謂美術敎育と稱するものは、美術學校、音樂學校、美術院等を始め、種々の美術に關する高等の敎育を爲して、其目的を遂げ得べしと雖も、斯る所謂美育は專門に非ずして普通の事なり、小中學程度は圖畫の科ありて、多少形象を描くとを得せしむるも、此以外亦美育の補助たるものなし、昔は小學に於て「色彩」を敎へしが今は中學にも見す、「形象」も圖畫による外、實物に當らしめす、余惟ふに普通美育として「色」「形」に關する大躰の智識と音樂科とを入るべきものなり、特に女學校に於ては必ず之を設け、一般美術に屬する智識と趣味とを開發し繪畫展覽、美術展覽會等に敎師自ら誘導し、其智能開進に資せしむるの要ありと信す。室內の裝飾と云ひ、書畫の撰擇と云ひ、衣服の調製と云ひ、器物の配置と云ひ、美育の素なきものは其の自ら宜きを得ざるものなり。

雜錄

（小說）銀　線

無名氏

秋は定め無き空を、夕時雨の昨日に替へて、十三夜の今宵特に折好くも、拭ひしが如く晴渡り、皎として掛る月の桂の、惟いみじき聖人にも逢ひたらんやうに貴く、塵の心も仰げは頓に澄みぬべき。

籬の菊可怜う映遍りて、紅葉は濃染の色深く、池の此方築山の上に、清らなる光を受けし一入の風情ぞ、實にや錦をも聯ね掛けたらんやうなる。

家の内には胡弓の音聞ゆ。庭に向ひて南向なる室は、障子半面打開かれて、籠洋燈の影灰なれど、床には白菊と梅擬、流は古流かいと晶に見ゆ、琴一面半切の古畵の軸に添ふて、柱の儘に立ちたり。書冊文庫美しき時計七寶の花瓶等、並居る違棚の側に、緋羅紗の色鮮なるを覆ひたる机を置きて、そを枕頭に、白布もてはりたる蒲團の上には、臥被疊みたる儘に、坐作も正しく。綿厚き羽織を被り、絲入の袷に單衣を重ねたる寢衣姿の、帶にとて卷きたる緋縮緬のみいと嫣冶きたれど、顏は瘠せて目圓に、睫毛目立ちて長う、高き鼻の今は鋭く、唇の朱を含みしやうに紅きは、色底なく白きが故にてもあるべきか、油氣失せて尙綠なす髮は、無雜作に束髮となし、富士額に垂れたる三條四條の、淡き雲の靉くかとも見ゆ。美しき人かな。惟淋しげなるは病の咎ぞ。殊に眉間の邊、例之秋の氣の此を一途に寓としたらんか、品位いと高けれど、春の和暢の氣なし。

胡弓の音は此人よりぞ。月の出端を一入頻る蟲の音の哀なるに通ひて、いと濃かに力なげなるは、唯曲の故には非で、病みたる床の上に、隨意の愛遊なればなるべし。

語はん友もなき徒然のあまりには、獨り慰むる道只一條に此と、今宵も早好める曲の大方は奏でたりけるが、猶飽かず、なにくれとなく學窗の昔の事ども、音に隨て引出さるゝ記憶をなつかしみ、繰返しては復奏でつ。

復び來べき時ならなくに、戀しきは昔、哀しきは今の身なるかな。去歲業を卒へたりし音樂學校に、日每通學ける頃の我は、早や盟ひし人ある幸ある身、學校を出づれはやがて、式

も擧るべしと、人に羨まれ囃はれ、面映ければ我も然か思へりしを、その時は我も然か思へりしを。

幸に學校は首席もて了へたりけるが、其頃流行したる感冒に三日許臥して、漸く其は癒えたる後も、顏色殊に蒼く、怪しかる咳嗽日毎に激しう、紅き糸の如き者さへ吐きたりしに驚かされて、穢れし心に神の寶位を仰ぐ心地しつゝ訪ひたりし醫は、仔細に診察したる後、夫ぞと早覺らるべき顏色に首傾けしが、只氣管を損ぜしのみと事もなげに云放ちける授けにし藥は、親しかりし友、今は亡せにし時子の君が、床の上にて糸の如き手して呑み玉ひつる物と全じ臭す。名は知らざれど肺病む人の飮むべき物なり。其より早一年餘の今日も、猶此樣の我は、猶其藥を飮む我は、外面に悽く蟲の霜にや亡せん、肺にや枯れん身の果か。我を幸あるとて樣々に囃したる友の大方は、丸髷の取調ろひたる姿に、幼見さゝ抱くもありけり。

今は其の儕と會ふ事だにいと稀なれど、曾ては全じ窓に日々集ひたる頃の可笑しくも將た樂しかりしよ、皆唐縮緬友染の帶、夏も帶揚の大なるを競ひ、絹氣僅少なる衣服は、束髪にしたる襟の生際まで衣紋を立て、紫の帕紗各々小脇に抱え、

吾妻下駄の音高く、歸途の十字街には、迂平とせし者脊を打たれ、お土産の明日こそ必定御報酬をと、口惜がるもあり。教室にありては、己が技術の未熟を思はで、教師に依怙ありと怨むもあり。休課の時は、替鬼の幼年に返り、黄き聲して喚きて馳せ廻るを、偶幹事の髯男傍に立ちてありしに心注かず、ゆくりなくその咳嗽に驚かされて見向くを、彼は微笑みつゝ、只年にも耻給へやとの一言に、皆顏打赧らめて、目交しつゝ靜まりたるなど、可笑かりける極なりし。斯りける折もありけるが、昔と過ぎし今日が日は、驚かるゝ迄皆の樣變りて、大方は思掛なき人と夫婦の仲睦まじう、奧樣と侍せらるゝ身の上とはなりけるよ。

種々と昔を忍ぶ心にも、猶胡弓は措かで、手は殆ど無意識に、平生好むなる某作の結婚進行曲を奏しつゝあるなり。歸ぎたる人を羨むとには非ねども、我も早二十歲の秋なり。疾に彼の君が許に歸くべかりし身は、此の病に臥して、而も癒ゆべき病に非ず、慰さめ顏なる月と、同情を寄する如き蟲とをのみ、今は唯切なる思の友として。

胡弓の音は細し長し、元來華やかなるべき曲を、心の想糸に現はれけん。

彼の君は云ひ玉ふ、今の病早く癒へよかし、癒えなば直にも式を擧ぐべしとよ。癒ゆべき吾病かは、壽命就きて、少時は少間る期ありとも、所詮根に虫の入りたる若木櫻の、風に雨に鬩れ行くべき身とは知らずや、假令少間ればとて、假令強ひて欲し給ふとて、血は子孫に引及ぶとぞ云ふなる肺患の身を、彼の君と其が家に献げ得べしや、まして頃日の吾心胸に怪しくも疑の涙立ちて、君と我との間を流るゝ川あるやうに覺ゆるを。吾身を献げぬぞ今は我のみの愛なる。

斯く思ふ時しもあれ、希有の事かな、バチと音して一の糸は切れたり、巻きたる銀の針金は、伸ひたる儘に、細く美しき螺旋をなして、切れたる中に繋がる樣の、妙なる意味ありげにも見ゆるかな。

恰度結婚進行曲の最中に、糸の切れけるは、早思絶えにし身の果なれど、有繫に忌はしかる極なり。糸を替ゆるも慵く、其儘胡弓を横ふれば、今迄は自らがなす音に、さのみとは思はざりし蟲の、勝を誇るが如く、庭の面にいと繁し。霜の明日の身も知らで、一生を謡ひて暮す蟲の、年齢未だ若うして、死病に魅せられつる我に似たるあはれさ。あはれは仝じ蟲と我となれど、憖ひに將來を知る心の人と云ふ我にあるこそ、今は却て恨なれ。蟲には有らず蟲の羨ましきかな。冬ざれは蟲は死ぬべし、此上に重らは我は肺患に死すべき身なり、さるからに些も世に未練殘さじと覺悟の末も、冥途の碍と云ふは、斯かる事をや云ふらん。彼の君が上のみは明暮に心放れず。我が方にてはさあれ、君が心の奥には疑ふべき節の隱れたらん心地す、吾が前にてはそよとも現はし玉はず、却て早倶になりけん後を語り、心盡しの慰め言は、折にふれて涙さへ落ちぬべき誠籠れども、吾が僻目かへ君を日頃より慕ひぬと知る京子の君に、君も亦思を寄せ玉はん樣に覺ゆ、誰告げたりと云ふにも非ず、其人の口よりには猶更あらず、自ら拂へども拂へども煙の如く、我が褊き胸に漲りて立ちも消えざる思なり。吾が迷としても、さあり度しと今は願ふべき哀しき身なり、そは哀しかる福音なりけり。噫我のみの君なりと思ひしも昔の事なり。

吾心の眞實は、君の誰とも添ひ玉はぬを願ふ、されどその思は、君を眞實に愛するの道に非ざるべし。彼の京子の君は吾が親しき友なる上に、我より萬事勝りたる人なり、有繫我への義理に愼しみて、君の名をだに云ひ玉はねど、君を戀ふ心

の切なさは、我と君との關係、世に明なりしより、誰にも歸かじと語り玉ふにても知らる。吾心の迷のみにして、君の心未だ京子の君に向ひ玉はずとするも、吾が亡き跡を憖じひの人と添ひ玉はんより、我は勇みて京子の君を薦め、生ける目にその新しき夫妻を見、玉椿の八千代までもと祝ひて死なん。

さなり〳〵と叫びて仰ぎたる眼は、常ならぬ麗はしき光に耀きたりしが、少時にして復垂首るゝ時、門の開く音す、蟲は礑と鳴を鎮めつ。然り、今宵訪ねんと君は約し玉ひき、君なるべしと思へば、珍らしからぬ訪ひ人ながら、初めて訪はせぬる時の如く、胸の轟く心地す、此方へ足音して襖明けんとする折、態と何誰ぞと問へば、我よとの應答ぞ、我のみの君に非ずと思ひつゝ猶ほこひしき〳〵人の聲なる。入り來りし人の、今日は如何にと先づ問ひ掛けつゝ、座に附きて、慰め顔に微笑む氣色の中より、温き泉流るゝやうに覺ゆ。逢見ては變らぬ君なり、君に仇心ありと見しは、我がまさなき僻事なりける。斯く思ふと共に、今の京子が事も打忘れて、我のみの君なりと心に叫びつゝ、ふと側を見れば、先刻

切れし儘なる不祥の胡弓横はれり。結婚進行曲の中程にて糸は切れたるに非ずや、我は肺患に倒るゝ身なるに非ずや。今日は少しく氣色良き様なり、此儘に過ぎんには、程もなく床を出で玉ふべき、藥をな怠り玉ひぞ、癒えなん時を待ちて直に例の式をも擧げん、其準備萬事吾心に畵きてあるをと、いと誠しやかに男は云ふ、

さて無下に早かる事よ、式塲は定まれる處、問ふは愚なれど披露會は何處に開き玉ふ御心かと笑みて問へば、先づ帝國ホテルと思ひつも、御身が望む處あらば、喜びて從はんと答へつ。我には望みなし只其の招待狀に些かの好あれば。如何なる好みか云ひ玉ふべし、版に起さんか、よき手に書かせんか否さる事には非ず、先づ今宵下書をば認め玉はずや。易き事なり。と答ふるに、紙と硯を差出されて、男は書い初めたり。案内の文終りて、男自らの名春遂 某、仝 と記しの女の名書かんとする時、押止めて、名のみは自らに書かせ玉へと云ふ、いぶかしみつゝ云ふが儘に渡せば、筆太に認めし名の京子となん讀まれたりける。唯驚く男を靜に打見やりて、態と微笑つゝも、有繫打震へたる聲音に、我が病は癒えざるべし。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

わかれ

花影

おぼろににほふ月影も、
思にたへぬさまにして、
ねむれる花をいだきつゝ、
おなじ夢路にあくがれぬ。

玉の緒かけてむすびたる、
かたきちぎりを天地の
神もあはれとおぼしけむ、
つねにはかたき隔さへ、
やう／＼とけて來りしに、
などてかおそき、かの君も
いかなる垣のあるやらむ、
こよひは夜半もすぎにしを。

あれ、きこゆるはかの君の
思こもりし足音よ、
一あしごとにわが胸の、
うつおとたかくなりてけり。

＊　＊　＊　＊

思あふるゝまみをもて、
をゝしき君に見つめられ、
いともくるしき樂みに、
我身はしぬるこゝちして、
きみがかひなのわがくびに、
なみたつ胸のわがむねに、
もゆるくちびる我口（わがくち）に、
君のわが身をいだくとき、
われも浮世もきえうせて、
たゞ君のみとなりにけり。

逢ふは別のもとにして、
などてわかれを逢ふことの
はじめとなりしよのなき、
やう／＼あひし今夜（こよひ）さへ、
別ときくはまことかや。
きみにさゝげし我命（わがいのち）、
もとより惜くおもはねど、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

わかるゝのみぞ堪へがたき。
隔のみなる世のなかに、
などてこよひの短きぞ、
はやにはとりも鳴そめて、
月の影さへかたぶきぬ。
胸のおもひの一はしも、
もらすとすればむせびつゝ、
あふるゝものは涙のみ。
君をいのちの我身には、
別れてのちをいかにせむ、
いかになげくも明るとは、
戀にいのちの夜さへも、
わが身につらき浮世かな。

あまりにかこつ我身をば、
心よわしとわらひつゝ、
またあふ時をまてかしと、
さとしたまへどなにゆゑか、
これを限りのこゝちして、
たゞ世の中ぞうらめしき。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

つきぬ名殘をそでにして、
見かへりがちにゆく君の
姿はやゝにとほざかり、
つゝむにあまる戀しさに、
またかけよりて縋らむと、
あせる思のなみたかき、
胸をおさへてたゝずめば、
もゆるおもひのなほもえて、
君がすがたのきゆるまで、
見うしなはじといくたびか、
拭へどくもるわがまなこ、
つきぬ涙もうらみなり。

いづこまでもと跡おひて、
空のかすみにとけてゆく、
こゝろも知らぬ朝風は、
ぬれし袂にたはむれて、
君がゆくへにうたひゆく。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

新刊書讀

◉慨世憂國、小川休家禽談

養鷄事業の總理大臣を以て任じ、辛苦自得廿年の實歷を以て熟達せる小川氏の家禽談は、尋常席上の空論として四洋直譯の書生談と異なる。曰く、飼鷄に最とも必要なるものは何ぞ。資金の多額なるに非ず、遊歩場の度大なるに非ず、家禽舍及柵の結構美觀なるに非ず、孵卵器其他諸道具の飾り付を要するに非ず、必らずしも種類の上等なるにあらず、最とも切要する所のものは、注意の懇到なると管理の普く行屆くもの一點にありと。而して、其注意の懇切なる、耳を以て鷄聲を聞分け、目を以て鷄姿を見分け、宛然慈母が愛兒を育する如きに至つて止む。氏の斯業に於る亦勉めたりと云ふべし。此書同氏多年の所論時談を一輯したるもの、眞に養鷄者の指南針たるべし」。夫れ、戶々の家庭、十數羽の鷄を養ふ難事にあらず。主婦もし之に任ぜば、愉快にして且つ益多く、合しては其の邦家に貢獻する所莫大なるべし。吾人は亦た千門万戶、家ごとに多少の鷄聲を聞かんとを熱望して止まざるもの也(發賣所、東京小石川下富坂町十番地小川休家禽販賣所。一册二十五錢)。

◉錦帶記　(泉鏡花、作)

鏡花子の作は、冷痛慘苦を旨として而もわざとらしく、喩へば、此の小說の口繪のチバケが、餘りに變化を裝ほひて反つて滑稽じみたるにも似たらんの病はあれど、此の卷にては、浦里が山北にスチル所、お禮に矯激の氣焰を吐くあたりは、同情實際に逼まりて、思はず讀者を動かし、人生の繼子に慨歎して、器械的仁義の說の熱血に添ひがたき秘義を見しめて餘あり。今少こしお時の無邪氣を發揮し紅絲相ひ反映せしめば、此悲慘を感歎せしむるとも一層深かるべきになど、憾まるる節も亦あり。古人曰く、身先づ妖怪を怖れて而して能く讀者をして恐怖せしむと。作者果して夢に惡鬼に魅せらるる底の暗黑ありや、聞まほしきとにこそ。

(春陽堂版)

◉蛇いちご　(小杉天外、作)

個人の性格氣質を特別に畫きたらん上より言はば、朦朧として定かならぬ節の多ければ、お京が煩悶の狀態、お高が流れ藝者としての氣轉などは、描寫極めて妙。殊に結構一縷の筋を貫ぬき、脈々斷えず、波瀾照應あり、潜心の作と云ふべし。男女痴情の人、別れんとして亦泥み、夜々最后の决心を送るの際、本と逆境に處して本心怜悧なる才子島林が、沒落せる家庭の慘劇を立ぎきして、決然心機一轉の斷を爲すあたり、作者同情の絕頂ならめ。其趣構、其理想、其人生觀等に於て言はば、此の小說や、必らず近時出色のものの一たるへし。(春陽堂版)。

◉名流淡海　(大橋乙羽、編)

乙羽子近時の著作、一々出版界を驚かす。其の潔美の意匠、其の圓滿の多藝、眞とに得易からざるもの也。殊に、此書の如き、各派の名流に浮んで、多様の水色を寫す。一々新鮮、能く人の渴望を醫す。(博文館出版)

◉北海道農論　(高岡熊雄著)

大農、中農、小農の區別の標準を解き、其の長短得失を擧げ、北海道に於げる將來の傾向を推察し、三種各農の經濟を計算し、該道農政の根據に一大參考を賦與したるものとす。實に遠大の經濟に莫る可らざるものとす。(裳華房、發行)

◉井伊掃部頭　(巖谷漣山人著)　博文館版

少年讀本第六編として、巖谷漣山人の筆に成りし『井伊掃部頭』出づ。山人平素の筆と異なり、こは堂々たる文字を以て、開國の恩人たる此人を傳す。少年坐右の友として、適好の傳記物なり。(鷗村子)

◉珊瑚島　附獨木船　(小波編)　博文館版

これ世界御伽噺の第三編なり。二話共に、ウヰリアム、ギル氏の著書より材料を取り來りて、圓熟輕妙の文字を以て、說き去り說き來りて、小見はおろか、大人と雖も、卷を措かずして、通讀せざる能はざらしむるの面白味あり。(鷗村子)。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

◎美術（第二號）　東京本郷金助町六十三番地（美術社）

本號より紙面、躰裁、文章、繪畫、長足の進歩にて眞に局面一新の觀あり。目今他の類なき斯道專門の雜誌なる上に、如何にも瀟洒としてゆかし。

◎出石雜誌（第一號）　但馬出石即出石町（出石會事務所）

是れ櫻井勉氏監督の下に出るものか、地方雜誌中、如斯く質實堅固、材料精撰せられたるものなし。此般の雜誌あらば、坐がら天下の形勢を見ろ、猶ほ掌紋を睹るが如けん。

反省（第一年第一號、第二號）	山城國葛野郡大内村（反省會編輯部）
體育（第六十六號）	東京牛込區市谷柳町廿五番地（日本躰育會）
憲政黨々報（第一卷第十號）	東京芝公園内（憲政黨々報局）
國學院雜誌（第五卷第六號）	東京麴町飯田町五丁目八番地（國學院）
ふたば（第一卷第四號）	大坂東區南本町心齋橋筋（金尾文淵堂）
靑年機關（第五十號）	東京小石川表町百九番地（靑年社）
教育實驗界（第三卷第七號）	東京小石川久堅町百八番地（育成會）
同第三卷第八號（教育論策三大問題）	同前
十善寶窟（第百九號）	東京小石川關口駒井町（目白僧園）
瓊の浦（第二十二號）	長崎大浦東山手（鎭西學院）
埼玉經濟新報（第十一號）	埼玉縣粕壁町三十五番地（埼玉縣經濟新報社）
國の光（第七十一號）	東京京橋區西紺屋町（銀座會館）
舊幕府（第三卷第三號）	東京日本橋區本石町三丁目（裳華房）
東京經濟雜誌（第九百七十三、四號）	東京彌左工門町（經濟雜誌社）
通俗衞生（第九號）	大坂東區北濵三丁目（大坂私立衞生會）
日本弘道叢誌（第八十四號）	東京京橋區南鍋町（日本弘道會）
日本教育（第六號）	東京麴町二丁目（經世社）
日本赤十字（第七十二號）	東京築地二丁目廿一番地（日本赤十字社）
社會（第一卷第三號）	東京神田裏神保町九（富山房）
ジャパン、エバンセリスト（第六卷第三號）	横濵製紙分社
法政新誌（第二十號）	東京神田三崎町（法政學會）
秋田縣教育會雜誌（第八十二號）	秋田市手形休下町（佐川盛信）
教育公報（第二百二十二號）	東京神田一ッ橋通町（帝國教育會）
英和商實用雜誌（第二號）	横濵堺屋雜誌部
農業雜誌（第六百八十三號）	東京麻布學農社
岡山慈善雜報（第十一號）	岡山市大字花畑（積善社）
教育時論（第五百二號、第五百三號）	東京神田錦町二丁目六番地開發社
日本人（第八十九號）	東京神田雉子町（政教社）
土佐文學（三號）	高知市雜喉場（土佐文學舍）

寄　書

十六夜日記をよむ

淺野すゞえ

あすか川流れて早き月日かな、學ひの道に入り初めしよりはやいく年、花咲く春を送りては、錦おりなす秋を迎へ、夏はみさりの木がげにはげみ、冬は埋火のもとにいそしみ、師の大人たちの御手にすがり、行けどはてなき文の林に分け入りては、世にたぐひなき花の香をあさり、淸き谷川に遡りては、御神のひめてしまぬことを語ろ、されど伊勢の海千尋の濵行く習ならねば、之さてひろひ得し玉持たぬこそ、かへすゞゝも我身のおろかさ、いとあさましく口をしけれ。

過ぎにし日、十六夜月は誘はれど、師の御教をたよりにて、十六夜日記を學びけろに、世のあらしにもあはず、物のあはれたに知らぬ心にも、ふしゞゝ身にしみつ、端なくもうつろは氣高き尼の面影なりけり、抑も此日記はしも、阿佛尼うつたへの爲めかよわき女の身にて、京を出でゝはろゞゝと鎌倉に至りし紀行文なり、頃は紀元千九百年代後宇多天皇の御代建治三年にして、鎌倉には北條時宗執權の職にありき、此日記よ、紫ゆかしき源氏の面影あるにもあらず、才艷なる枕の草紙の姿あろとしにもあらず、文學の花咲き亂れて、色香あらそひし、平安朝の美はしきにたぐふべくはあらざめれと、昔壁の中より出けん書の、世の人の子に忘らろゝ果敢なさを、なげきつゝ、鎌倉の世の政事こさしげくて、聞えあげてし言葉のさとこほれろ、不斷の幕府を怨みつゝ、あさましの世ようれたき樣よさ、悲しき調にかぎりなき誠をよせし、筆のあさの妙にもあはれにて、遠き古の忍ばれ、さすがに涙もよほされてなむ。

人の書き出づろみづくきの跡、大方はたゞ其文のたへなるをめで、徒に其言葉のよしあしのみあらそふは、世のさがなれど、眞の文學こそは、げに其人の心、其人の姿なれ、鴫立澤の古事には西行のうき世へだてし、自然をめづろ面影をしたひ、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

行く川の流には、長明の世をなげきし氣高き想の忍ばれぬ、いともはかなき習なれど、花は散れども又咲くめり、月は曇れど又てらすめり、うせゆく人ばかりはかなき者はあらじかし、よべとさけべと聲はなく、尋れどとへど姿はあらず、さはれ其身はくつるとも、いく年月は流るれども、くちせぬ者は文學にこそ、古の書を讀みて面のあたり語らふ心地し、其人の性の推し量らるゝは如何ならん、霜枯の淺茅がもとの虫の音に、雲井にかゝる紫の、匂ゆかしき藤なみのゆかりに、絶えず古の忍ばるゝは何故ならん、之れぞ文學は人の心の反照なりと謂ふ故ならん。

そも阿佛尼は何人ぞ、今更かく云ふも事あたらしけれど、安嘉門院の四條とて、權大納言藤原爲家の妻にして、冷泉爲相の母なりき、歌にも文にも勝れつれば、勅撰にさへ入り侍りしもさはなりとなん、その家居や如何にみやびなりけむ、玉しきの都にすめりけるを、月かくる世の習にて、異腹の子爲氏が、父の所領を還さゞるをいかり、せん方なく鎌倉に訴へやがて其怨をいだきて旅の空にてみまかりき。その乳母の文をよみなんには、德高く操正しく深きなさけを見るべく、夜の鶴をひもとかんには、大和歌に秀で、且はめでたきそが才學を見るべし、十六夜日記は、たゞはしたなき女のなげきならで、道を助け子を育めと殘せし細川の流の、故なくせきとめられしかば、たゞ其一片の領地に心置かれしとにはあられども、深き契りを守るに餘念なく、ひたすら貞節に身をしたがへ、惜しからぬ身一つはたやすく思ひすつれども、子を思ふ心のやみは猶しのび難く、道をかへり見る恨はやらん方なく、如何でくもらぬ影のうつさまほしく、道を思ひ家を思ふ一すぢのまめなる志、亡き人を戀ふの情にあふれ、我立ちさらばと歌ひし心やいかなりけん、忍ぶ昔の夢の名殘を、語らひかれつる胸の中やいかなりけん、さむれば見えぬ人のおもかげとかこちしとかや、且は我子の返り事のうれしきにつけても夫を思ひ、旅寢の夢に目さむるにつけても昔をしのびしふし〴〵など、とり〴〵に要たるもののこよなきみさを殘せし文學にこそ、子を思ふ清き涙には、

つく〴〵と空ながめぞ戀しくば
　道とほくともはや歸りこん

心の中こそ此歌にもつくし得ざりしならん、そをそだてん情には、

君をこそ朝日とたのめ古さとに
　殘るなでし子霜にからすな

そのゆく末を思ひては、

我子とも君に仕へん爲ならで
　渡らましや關の不二川

と歌ひてし、さすがに子をおもふ情のみち〳〵て、あはれにもゆかしき母の文學にこそ、其子紀内侍につかはしける訓の文にも、先づ人は心にて、いかにみめよく物學びにすぐれたりとも、心定まらぬには其かひなく、又は女のたしなみ、手かくこと歌よむ事ども、文の心得など、いとねもごろに書き贈りし、げに母の文字にてみちけるにはあらずや、婦人は情の人涙の人なりとかや、げに尼が流せし血の涙こそ、此日記をうるほして、今もなほ讀む人の袖をぬらすめれ、東路まではとはいへと、道のたよりあしければ、はるかなる旅の空おぼつかなく、かりねの夢にも、浦風のひゞきにも、行かふ遠の白雲にも、あたし東の花見るにも、夫を戀ひ、子を思ひ、家を忍び、故さとをしたふ、一字に涙あり、一句に情あり、げに婦人文學の粹なりや。いつれをあやめ定め難かる源氏物語と枕の草紙とは双つの璧とて、こよなうめでたき文學なりとかや、さらば石山寺の秋の月は婦人のほまれか、香爐峯の雪は婦人のほまれか、人はみなしか云ふめり、さはれ三上參次氏、その文學史に記して云へるやう「英國チャールス第二世の頃、世の中の風俗いたく亂れ其文學卑陋を極め、貴婦人は彼の時代の書を讀みしやと問はるゝを、皆面あからめて、やがて話をよそにうつせしと」かや、實にうべこそおもほゆれ、我身はつたなくて、紫の名こそ聞きたれ、讀み習ひし事なきにぞ、めでたきふし〴〵も知り得ぬいとかひなけれど、其頃の有樣とはいへ、源氏はみだりなる事ども記して、昔の人も、こは人の見るべき物にあらずと云ひしとか、まして清少納言のはしたなきしたりがほの姿の、などてやは婦人のほまれなるべき、いやしくも文學にして其巧を言葉の末にあらそひ、其思想の及ばぬは、花の色うるはしくして香なきにやたとへん、阿佛尼の日記ぞかゝるものにはあらざりける、雪間に匂ふ梅が香や、いとかぐはしくかをりつゝ、其思想もいと高く清き操を殘せしこそ、實に文學のかゞみとこそ云ふべけれ。

之れ鎌倉時代文學の特色ぞかし、定家卿の新古今はしばらく云はず、西行の山家集、長明の方丈記はさらなり、平家物語の戰記文にも、自ら天籟の響きあるはいかに、保元平治の亂れさわがしきに、平安朝の榮華の夢さめて、これも無常よかれも煩惱よと、さとりし佛敎の感化いちじるきなりけり、十六夜日記は、此時代に出て來し新らしき文體を取らて、さすがに平安朝のやさしき筆の跡なりしかど、其調こそは全く此時代の精神なりけれ、阿佛尼は悲みにき、嘆きにき、かくて道なさらんとあせりては

たのもしな身にそふ友となりにけり
妙なる法のはなのちぎりは

と、危きほどの心細さも、さすが御法のしるしにや今日まではかげとゝめてさ、法華經に一心をころせとも、安心の住み家求むるに由なく、鬱燒く烟の風に消え行くにつけても、その運命のはかなきをかなしぶいとあはれにて、月かげの谷の露と消えにし、その恨やいかなりけん、さはれ後その訴かちて、和歌所は長く爲相に歸せしかば、その恨こそきえ行きしならめ、されど法華經にえ安からざりけん其心やいかなりけん、

みつくきの跡とふ道のたよりこそ
師の御敎のしるしなりけれ。

今も此十六夜日記をくりかへしつゝ、朽ちせぬ文學の盛はれて、婦人のやさしき情を熱き涙もてかくは誰ぞとそぞろに忍ばれて、宗敎の文學に淺からぬ根ざしなるを思ひ出されて、ひたすらに基督敎に養はれたる婦人を我が明治の文學に待つはいかならん、歐米の文學はこの敎にて、其思想もいと高く、其調もいとつよしとかや、あはれ我文學はいかに、阿佛の尼の跡吊ふも、いかでたゞつれ〴〵のすさびなるべき。

山の端にいざよふ月の面かげに
清き姿の忍ばるゝかな

時事

◎時事新報の女學論

時事新報此日頃の紙面の要項は、殆ど女學論を以て、埋められたり。福翁の女大學評論は、每週二回宛、揭載せられて、手當り次第に貝原益軒の女大學の頑迷固陋なるを離破す。論旨の假借なく、男子の女子を輕蔑するの惡弊を痛慨するは、精神の喜ふべきものなりと雖も、議論の筋道に就きては、吾人素より悉く之に贊同すると能はず。扨て、福翁がこの評論を發表するの理由なるもの、四月十四日の新報に見ゆ。翁が女學論に於ける考慮深きものなるを知るに足るべければ、左に轉載す。

先生が此論を起草せられたる由來は序文にも記したる如く一朝一夕の思ひ付きに非ず恰も先天の思想より發したるものなれども昨年に至り遂に筆を執て世に公にすることに決したるは自から謂はれなきに非ず親しく先生の物語られたる次第を記さんに先生は夙に此一事に心を留め二十五歲の年、初めて江戸に出でたる以來、時々貝原翁の女大學を繙き自から略評を記したるもの幾册の多きに及べる程にて其腹稿は既に幾十年の昔に成りたれども當時の社會を見れば世間一般の氣風兎角落付かず恰も物に狂する如くにして眞面目に女學論など唱ふるも耳を傾けて靜に之を聞くもの有りや無しや甚だ覺束なき有樣なるにぞ只これを心に蓄ふるのみにして容易に發せず以て時機の到來を待ちたりしに爾來世運の進歩に隨ひ人の心も次第に和ぐと共に世間の觀察議論も次第に精密に入るの傾きある其中にも日本社會にて空前の一大變革は新民法の發布なり就中親族編の如きは古來日本に行はれたる家族道德の主義を根抵より破壞して更らに新主義を注入し然かも之を居家處世の實際に適用す可しと云ふ非常の大變化にして所謂世道人心の革命とも見る可きものなるに其民法の草案は發布前より早く流布して廣く世人の目に觸れたるにも拘はらず其規定に對して嘗て異論を唱ふるものなきのみか十二議會にはいよ〳〵之を議決して昨年七月より實施せらるゝ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

こと〻は爲りぬ先生は此有様を見て恰も强有力なる味方を得たるの思ひして愉快自から禁ずる能はざると同時に又一方を顧みれば新條約實施の期限は本年七月と定まり僅々數年の後には外國人も內地に雜居して日本人と鄕黨隣人の交際を爲すに至る可しと云ふ從來の儘なる我國男女間の關係を彼等の眼前に示して其醜態を滿世界に評判せらるゝは國光上の一大汚點、日本國民として斷じて忍ぶを得ず之を矯正する一日を遲くすれば則ち一日の恥を永うすべし世人の改新を促して自から謹ましめ以て國の體面を淸潔にするは何は扨置き目下の緊急事なりとていよ／＼宿論發表の時機到來を認め昨年八月中より遽に筆を執り僅々三十日足らずの間に稿を脫したる次第なりと云ふ左れば女大學評論及び新女大學の二篇は先生先天の思想に發して腹稿は旣に幾十年前に成りたるに拘はらず之を公にするの機會を得ざりしものが時勢の進步とや云はん人心の變化とや云はん一方に新民法の發布はいよ／＼先生をして恰も有力なる味方を得たるの思ひあらしめ又內地雜居の切迫はいよ／＼其蘊蓄を發するの必要を感ぜしめて爰に始めて此論を公にするに至りしものなり

と、然らば、これ、翁が、十數年前に、かたわ娘、男女交際論をものしたるは、今の女大學評論をなすと、同一の精神なり。福翁多年の百般の議論の根底たる、日本をして、外邦文明の國と同一ならしむべしと云ふに在り。女權伸張を論ずるも、また此根據より胚胎す。我邦は實に翁を待つに、過激なる女權論者の旗頭を以てすべし。

新報は、また其社說に、屢々男德の腐敗を慨して、之を匡正せんが爲には、まづ／＼表面の體裁より始むべしといひ、また東西開化の論をなして、社會より家庭より、國體の內事、外事共に西洋と同一なるべしとの、例の說をなすもあり。或は『男女の學說』と題して、人間の生殖論よりして、女の腹は借物に非ずと說き、男女同權を證せんとす。また尤も可笑しきは、『女大學評論』を讀んで、男女が、舊來の過ちを悔ゆる旨を記したるものゝ、續々該新報社に寄せらるゝよしにて、其等を『懺悔集』と名けて、續出するものなり、また『一筆申上候』と欄中にも、續々として、この評論に感服敬嘆する旨を投書せり。福翁の一論、かくの如くの感化を有すとせば、其力の大なる、實に驚くべきものなりと云ふべし。しかしまた、これ等は、內輪のカラクリなりとせば、其女學論を以て天下を動かさんとするの勞、勉めたりといふべし。

なほ又、片岡健吉、三好退藏、下田歌子等の婦人に關する意見を揭ぐるものあり。他の諸名士の意見をも引續き揭載することなるべし。

◎學生品行の墮落

近日淺草警察署に於て調査したる處によれば、府下書生の芳原遊廓に出入するもの甚だ多く、一日平均三百名、五日間に千五百名の多數を見たりといふ。たゞ芳原に於てのみ然り、多の遊廓に遊蕩するものを調査し來らば、其數、甚だ驚くべきものあるべし。たゞに、之れのみならず、種々の惡行、盛に流行して、書生氣風の墮落、日に甚しきを加ふ。世を憂ふるもの、焉ぞこれを顧みざる可けんや。吾人は先きに、之が匡正策として、教育警察なるものを設置せんと希望したり。然るに教育家の多くは、俗吏をして、教育に立ち入らしむるは、自家の體面を損するものなりとしたるもありしが、いよ／＼頹廢の甚しさを加へて、教育家等にて如何ともする能はざるに至りし今日は、止むを得ず、この腐敗を救ふに、警察權を假らんといふものあるに至る。然るに當局者、これに意を用ゐると無きが如きは如何。曩に大阪府に於て、他府縣に率先して、教育的警察の實施を試みたる鈴木定直氏は、今警視廳に入りて、樞要の地位にあり。氏、此時に當りて、何の策かある。

◎教育家と藝妓

堂々たる一教育雜誌の報ずる所なれば、信用すべし。曰く、高等師範學校內の倫理學會相議して、藝妓をば宴會に招くに、單に藝人として入るべし、酌人は一に雛妓に限るべしと定めたり。といひ、また、東京師範學校教員の一部の發起に係る富士見樓の料理研究會にては、藝妓を呼ぶときの都合は如何すべきや、近々研究すべしとの報を聞く。吾人は此二報を耳にして、愕然たらざるを得ず。單に藝人として藝妓を聘すべしとの曖昧なる言前、または、其宴席の工合を研究して、藝妓の配置を考ふるなど、苟くも教育家たるもの、かく迄に苦心して、而して、なほ藝妓の如き賤業の徒に近かんとするか。且つ夫れ普通教育の根源たるべき、高等師範學校の、しかも其倫理學會が、なほ此惡弊を容れんとするに至りては、憤然たらざるを得ず。教育家にしてなほこの陋劣なる行爲を敢てせんとするものあるに於て、焉ぞ、學生風儀の頹廢を喋々すべけんや。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

片々

●東京府下諸新聞の女學論　帝國議會既に閉され、內閣の動搖また起らず、今や政界は寂寞となりたるにつけては、新聞紙も、問題なきに苦める結果、時事新報が女學論の鼓吹につれて、府下の新聞紙にして、女學論をなすもの、尠からざるに至れり。其諸種議論の梗概を擧ぐれば、

○四月八日の京華日報は『人種競爭問題と婦女渡航奬勵』と題して、人種競爭の最大なるものは、人種的競爭なれば、國家の世界に對する策としては、殖民的方法を以て、同人種を培殖するは永遠の大計なり。扨て人間活動の大動機は食色の二に在り。且つ人間は色欲無くして活動せず、之を滿足し得べき希望なくして、殖民たるもの、其地に安んせず。されば殖民者の妻を携ふるは最も善き事なり、政府が是迄、海外出稼醜業婦を拒がんとして、婦女子の移民を制限したるは、下手の道德にして、國家に益なし。婦女移民の減少は、殖民事業に生活なく、光華ならしめ、又は同人種の生々繁殖の目的を空に歸せしむるに至る。醜業婦何ぞ恐るゝに足らん、歐米諸國も亦之を有す、外人の惡口意とするに足らず。婦人あらば、男子其地に行くべく、又留まるべし。從つて事業界に、利益興り、利の有る所人多く來り、人多く來らば單に醜業婦のみにては足るべからず、必ず妻帶の移住民を生じ、家を成し、族を生じ、茲に同人種生々の產を成すべし。醜業婦、此人種的大目的を成さしむるの先導者として豈に功なしとせんや。と、論の精神の國家獨尊的なるも、予は之を採らずと雖も、婦女移民をする許可べしとの說は吾黨多年の議論に合す。

○同日報はまた九日の紙上に、『歐米の淫賣婦と日本の公娼』と題する城山生の寄書を載す。論旨は歐米到處に淫賣婦の橫行を極むるとは、日本公娼の比に非ず。彼は、自巳の家業となすものなれど、此は父母兄弟一家の事情に迫まられ、已むを得ず、此行をなすものなり、其心術の陋、風敎の頹破、孰れを甚しとするやと、敢て我公娼を耻ぢさせざるとは、日本主義者の說。

○四月十一日の國民新聞は、『社交上に於ける婦人の狀態』を論じて、我が社交上に於ける婦人の狀態、は寧ろ明治二十年代に比して、逆戾りの趣あるは、甚だ慨嘆すべき事實といはざるを得ず。如何なる故にや、婦人の公會の場所に出づるもの、近來年を追ふて減じ、自然に婦人を招待するの風も減少して、これに代ふるに尊敬すべからざる女性の社交上に跋扈するは、近頃著明の出來事なりと慨し、また翌日の紙上『婦人の敎養』にて、此論を次ぎて曰く、以上慨嘆すべき事を改善するの方法に、尊敬すべき婦人に、社交的敎育を與ふるに在り、今や我國の尊敬すべき婦人中には、殆んど男子の世間話の相手になるに堪ふる者すら多からず。男子の前に在るや、恰も、呼吸ある木偶の如く然り、故に男子は尊敬すべからざる木偶婦人の爲に、男子を攻擊して、自から快なりと爲す能はずと。

婦人を近くるに至る。吾人は敢て斯る男子に一點も同情を表せざれども、徒らに、

○四月九日の報知新聞は『婦人の罪』を論じて、女子の罪過は其無學不術の致す所なり、然るに女子をして此に陷らしめたるものは、男子なり。婦人の罪は又要するも男兒の罪なりと痛嘆す。

○四月十三日の東京朝日新聞の『男德論』の要に曰く、今日我社會に於ける女子の枉屈は必ずしも貝原先生の女大學によりて然るに非ず、その原因は猶近く、目睫の間に在り、即ち維新の書生が、醉ふては美人の膝を枕とし、醒めては、天下の權を握らんとを理想として、賤女をして堂に登らしめたり。夫れ如斯にして、女性の墮落せざらんとを致さざるを得んや。而して其本を論ずれば、即ち男性の脩まらざりしに因るものなりといひ、また翌日紙上の『私德と公德』にて、近來我社會の墮落の脩まらざるを見て、竊に嚬蹙に堪へず、人々公德の脩まらざるは、その私[illegible]因るものなりと慨す。

●男德と女德　此頃の言論社會が社會の腐敗甚だしきに着眼し來りて、男德の頹廢を攻擊し、また女德の頹廢は男子の罪に在るを多きをいふものあり。此に至りて、吾人は、この議論に關し、明治三十年の孟春頃、經濟雜誌の雨夜亭氏と、連に筆戰して、彼は主として、女德の頹廢のみを攻擊し、我は主として男德の頹廢を論じたるに、世態かはりて、今日にては、女德却て辯護せられんとす。

●女大學の論　福澤先生は近ごろ昔の女大學を取り來りて大に反對論を時事紙上に揭げ居れり先生は彼の書の說が今日の時世に合ずとて之を攻擊せられど其は大人氣なき心地するなり貝原とても今日の文明世界に生れなば斯ばかり頑固なる論は吐くまじ彼書述ぶる所は著者存生の頃の時世に適する樣とて編みし者なれば十臺が巳に相違し居れり之を逐條に駁擊するは酷に過る(東京朝日新聞彌生山人)

●洋妾の事、讀賣新聞が四月二日の紙上以後內地雜居後の三問題として、洋妾、雜種兒、外國醜業婦の三者につきて硏究する處あり、先づ、其一、洋妾につきて、發日の紙面に渡り揭載す、更に見るべきものなり。其記する處によれば、洋妾の起因は、隅田川長命寺境內の名物櫻餅屋の三人娘、其長女が和蘭公使フオン、ポルスボクに畜はれ、仲女は、和蘭公使館書記官キリンケの洋妾となり、季女は英國汽船會社の船長クリチツスに畜はれたり。この三人娘をはじめとして、次第に洋妾の數增加したるよものといふ。これは東京橫濱にての元祖なるべきか、長崎などには、最も古くよりの洋妾はありしなるべし。

●諸新聞紙上女學家庭論雜俎

（本誌〆切まで）

◎令孃鑑　（松平榮子孃（十六歲）○德川芳子孃）　千代田日報連載

◎女大學評論（福澤諭吉）　時事新報連載

◎男女の學說（腹は借物なるか）　仝四月十日十二日

◎懺悔集　（維新の亂暴書生某○軍人の妾某○曾て人の養子なりし者○大阪西區商某）　仝四月五、六、七、十一日

◎日本婦人問題　片岡健吉氏○三好退藏氏○下田歌子女史　仝四月、三八、十二、十五日

◎東西同化　仝四月二日

◎表面の體裁より始む可し　仝四月七日

◎福澤先生の女學論發表の次第　仝四月十四日

◎福澤先生の女學論（天眞子）　仝四月三日

◎日本の女學論（愛讀者の一人）　仝四月四日

◎婦人の服裝の改良必要なるべし（東京河合はま女）　仝四月八日

◎人種競爭問題と婦女渡航奬勵　京華日報四月八日

◎婦人の頸　報知新聞四月九日

◎歐米の淫賣婦と日本の公娼（城山生）　京華日報四月九日

◎社交上に於ける婦人の狀態　國民新聞四月十一日

◎婦人の教養　同　同　十二日

◎男德論　東京朝日新聞四月十三日

◎私德と公德（男大學評論）　同　四月十四日

◎家庭の栞　家事問答、一家言、女子と美貌等　大阪每日新聞連載

◎家庭の爲　海南新聞連載

◎筆のまに〳〵（卜里老猿）　（女、男、スパルタの女、ローマの女、フランスの女、イタリーの女、ドイツの女、北米の女、支那の女、南の婦人、北の婦人、婦人の名、ミルの婦人貌、婦人の身。）　京華日報四月二、七、八日

◎內地雜居後の三問題　讀賣新聞四月二日從連載

◎夫人の素顏○稅所篤子刀自のつとき　報知新聞連載

◎帝國婦人協會の事業　中央新聞四月八、九日

時報

◉學事

●女子高等師範學校第十回卒業式　は三月卅日擧行

◉大津市高等女學校卒業式は三月廿五日擧行、卒業生、本科二十二名、補習科十二名、技藝專脩科廿二名、合計五十六名、なほ修業證書を受けて進級したる生徒は二百四十五名なりといふ。

◉大阪梅花女學校第二十一學年卒業式　は三月卅日擧行、卒業生九名。

◉仙臺女學校第五回卒業式　は三月卅日擧行、卒業生七名。

◉前橋共愛女學校第八學年卒業式　は三月廿九日擧行。卒業生普通科八名、裁縫專修科一名、同日創立十年紀念會并に增築落成式ありたり。

◉長崎梅香崎女學校卒業式　は三月廿四日擧行、卒業生二名。

◉松山女學校第六回卒業式　三月廿九日擧行。卒業生十九名。

◉鳥海女學校の擴張　東京神田小川町の同校は、今回更に洋學部に井上哲次郎氏を、漢學部に依田百川氏を、國學部に小杉榲邨氏を、夫々顧問に聘して、高等教育に關する學藝を教授する外、點茶挿花日本料理等を實習せしめ、又各地方就學生の便を謀り、校內に寄宿舍を設け、校主鳥海秀子女史自ら之を監督する組織となし、四月三日生徒卒業式を併せ、創立後滿十年の祝宴を催ふしたりと。

◉名古屋清流女學校第七回卒業式　三月廿七日擧行。卒業生全科一名、撰科五名

◉明治女學校第十三回卒業式　四月七日執行。

●橫濱フエーリス女學校卒業式　三月卅一日擧行。

●高等女子師範學校入學者　高等女子師範學校にては四月十一日を以て生徒五十四名の入學を許せり、右は昨年中各府縣知事の推薦に係る百三十八名の志願者より、此度の入學試驗に合格せるものなり。尙ほ同校附屬高等女學校も昨日五十三名の入學を許せしよし。

●鳥取英和女學校第七回卒業式　三月三十日擧行ありたり。

◉女子工藝女學校、帝國婦人協會の一事業たる、實踐女學校、女子工藝學校は、四月廿日より開校の筈なり。つゞいて、慈善女學校等を設立する運の由。

●女兒の就學督勵策　小學校未就學兒童中女兒の不就學者殊に多くたとひ就學する中途退學するもの甚だ多く殊に地方に於て此弊甚しきを以て內地雜居を眼前に控え旁々女子教育の急一日も缺くべからざるを以て當局者間には未就學督促選擧留學の法に就き目下熟考中にて其結果或は女兒の就學年齡を早くするに至るべし

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

さいふ。

●愛媛縣高等女學校　近時官民とも女子教育に對して大に注意するの傾向あり現に松山市に在る高等女學校は昨年四月以來縣税より幾分の補助金を交付し居りしが越智郡今治町及び北宇和郡宇和島町にても町立を以て高等女學校を設立することなり來月より開校の筈にて開校の上は三校とも千五百圓宛の補助金を與へんことに決定し居たり然るに本年二月勅令第三十一號を以て高等女學校令發布ありしに就き當局者は縣の中央なる松山市に完全なる縣立高等女學校を設立して今治、宇和島の二箇所には縣立代用の同校を設立するの案を立て之を今回の臨時縣會に諮りたる處東、南部の議員は地方的感情より松山市にのみ縣立女學校を設立するは不賛成なり三校とも宜しく代用學校と爲すべしとて反對同盟を造り種々畫策したる結果去る二十七日の議場に於て十二名に對する十五名の多數を以て三校とも代用學校となし二十五年を期して設立することに決したり然るに此決議たる高等女學校令の精神に悖戻せるに由り大庭知事は閉場式前特に協議會を開き再考の上決議變更のことを求めたも多數の議員は頑然として前議を執りて動かず終に協議會の目的を達せずして止みたり知事は或は原案執行の擧に出るならんと云ふ

(大阪朝日新聞)

◎會合

●帝國婦人協會の役員　は今般、(會長)下田歌子、(理事)岩波澄代、河野鬪子、松本荻江、(幹事)遠山稻子、加藤木の芽、龍田松枝、田島秀子、向井惢子、松本榮子、柴田貞子、長谷川虎子、永田錨子、(財務主幹)森清左衞門(財務顧問)森村市左衞門(囑托評議員)加賀美光賢、河野廣中、高橋與市、根本正、粟原亮一、子爵榎本武揚、子爵三島彌太郎、伯爵東久世通禧、子爵日野資秀、男爵千家尊福、(囑托顧問)細川潤次郎、男爵高崎正風、子爵品川彌二郎、伯爵土方久元、なり。因に云ふ同會は昨年十月新設、近頃に至りてやうやく發表するに至りしものといふ。

●婦人慈善會　京都婦人慈善會は四月二十六日午後一時より府立高等女學校内に於て開會す。京都大學總長木下氏の夫人も今回入會し其他にも新に入會せしもの五十餘名ありといふ。

●東京市の慈善會　東京市の只一の慈善事業なる慈善會は、去る廿八年第八回を開きし後御大喪等のありたるため中止し居りしに、本年は市も獨立したれば、松田市長の夫人副會長となり一層其の規模を擴張し、貴婦人の事業として恥ざるの會を催ほす爲に其の會場を三崎町の東京座と定め四月十二日より七日間市川團藏等の一坐にて慈善演劇を開きたり。

●淑德會　府下賣藥商の女房達六十餘名は今度淑德會と云ふを組織し四月十四日柳橋柳光亭にて初集會を開けるよし。

●婦人教會　島根縣那賀郡今市村萬福寺住職福本峻哲氏は、地方の婦人社會の風習に、家庭教育上に其他、慨すへき點少からずとて遠からす、今市村に於て婦人教會なるものを組織して、大に惡弊を矯正せんと企てつゝあり、猶ほ師は全力を揮ひ、他宗の僧侶と共に一團躰を組織して内地雜居の準備を爲すへしといへり。

●料理研究會　今回東京師範學校教員の一部に料理研究會なる者を設け須藤周一郎氏會主となり第一回を此度飯田河岸富士見樓に開きたり來會者は一先づ談話室に休息し食卓の準備整ひし報を得て食室に入る食卓は十人位並び得る牛高の卓にて其位置に坐す卓の中央には池の坊流の活花を据え水菓子又は蒸菓子を盛りたる器を置き箸は紙にて包み並べ置きまづ第一吸物口取より第二さしみ第三いり鳥第四すし又は飯第五コーヒ又は茶にして酒は日本酒及ビールを出し盃又はコップを用ひ料理は引替へ出す事西洋料理の如し配膳の女中は兩人會主の後に坐し一に會主の指圖を受けて給仕する事等にして終れば一先づ元の談話室に退きて夫々退散する事なるが香の物を添へる點に付ては第二回に決定する由而して此方法たる外國人と共に宴會を開くも日本料理の口に合ふ樣に献立するものにて其時に及び料理の献立を變へる事は勿論なれども只椅子によらずして食する事を主とするものにて藝妓を呼びたゝみ時の都合も猶是より追々研究する筈にて近々第二回を開く由なるが其食室の如きも天井は張天井にして尤も清潔を專一とすれば富士見樓にては特に此一室を新築せんとて既に着手せりといふ

◎人事

●婦人の義氣　愛媛縣宇摩郡土居村纐木直子は本年六十五六歳の婦人なるが稟生義氣あり同國非增租同盟會組織の擧あるを聞き深く同情を寄せ會費幾分を補足せんと金圓寄附の事を同會幹事迄申込みしも幹事は厚意を謝して金圓を返戻したりと云ふ

●老産婆原八重子の訃　産婆が「とりあげ」てふ賤稱の下に生息せし明治十二三年の交早く心を泰西の産婆學に潜め、開業以來爰に二十餘年、當時所謂西洋産婆の新紀元を開きしに於て、幾多後進産婆學女生をして家を成さしめしに於て大に力ありし原八重子四月十二日を以て駿河臺南甲賀町の自宅に逝けり享年五十

●婦德　北海道永山村屯田曹長水野英太郎の妻シキ夫の死後小學校の裁縫教師に屆はれ獨力家政を理し二人の子供を小學に入れ又他の赤貧者を見れば食を節して之を救恤す道廳長官其婦德を賞し木杯を賜ふ。

●子爵平松時厚氏の令孃剃度式　松平子爵の令孃定子(七才)は、本所荒井町感應寺の住職輪馬間聲尼の徒弟となり、法名を、誠厚と名けたるが、四月二日增上寺法主に請ひて、剃度式を行ひたり。

●德川芳子　伯爵德川篤守の令孃芳子、父の放行の爲に、苦難を細にする美談、千代田日報、報知新聞等によりて、傳へらる。就て見るべし。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

海舟餘波（批評第一回）

◎紀伊毎日新聞（卅二年四月六日）

上品な小册子であるが百九十六頁有つて卷首には伯の眞影と手蹟が先づ讀者をして偉人を追想せしむる、全面伯が氷川の清話で嚴本君が毎週訪問して直接に其の話しを聞き可成其の言葉の通りに書かれたもので、偉人と人物の對話とも言つて好いが兎も角世間のものとは何となしに異なつて居る樣だ、どうれ少々是れが解剖を試み海舟翁の言葉をも拔摘して見やう

初めに氷川のおとづれと題して之は翁の居常を精純に畫き出したもので氷川に翁の御宅に行かないものは是を讀んで其の光景を會得しなければいけないと思ふ。これから清話のしらべに由て初めて翁の奇音は起つて來るので讀み始めるとやめる事が出來ない時には噴飯する事も愉快な事も感心する事も又は就て翁を想ふて泣き度くなる事もある、或る一節に斯んなのがある、ナニ、紀州で新設（遊廓）すると、置はすまいどうしてもと無かつたか知らないが先からの風だ、其代りに淫風はひどいよ一年ほど頼まれて行つて居たからよく知つてます。どうだらう和歌山の第一の耻はこれなんだ又或一節に田舍の議員が來て生意氣なとを言ふから『馬鹿奴うぬ分つてたまるものか』と怒つてやつた、『お前に己が米の事を言つても信じやすまい笑ふだらう、己れに政治の事を云ふのはお前に米の事を言ふやうなものだ、こちは五十年政治で飯を食つてるものだ』と言つてやつた、又一節には『西郷への詩がイアーわざ〳〵持つて行つて貰つたまた此樣な際はウッカリすると馬鹿者が出て騷ぐがら子、ア丶やつて置いたのサ

俯仰七十六　嘯傲大江東　知否九泉下　海内亦滚々

讀者に紹介するものが澤山ある、けれども讀者は一册を購ふて再讀した方が好い、紙幅の小さな本紙には充分批評などは出來ないから大概これ位にて止めとこう。

◎九州日々新聞（同四月六日）

勝海舟は何人ぞ傲語一世を罵倒し笑談又た天下を茶番視するの趣あり氷川の閑天地に蟄伏して冷眼風雲の變態を看過し優臥意當世の榮利に絕ちしも耿々一片の至誠常に邦家の隆替に焦心し深く憂ひ深く慮るに至るときは終に病をなせりと云ふ而して彼が王政維新過渡の際に留めたる歷史は赫灼として彼が後半の閑生涯を照し閑愁の偶語は能く海内に反響して隻話斷語は大珠小珠の玉盤に落つるが如く咳唾悉く珠をなして氷川の閑話は能く天下の俗耳を澄したりき彼れ豈に聖代、巖穴の士と謂つべからずや、しかも熱誠心血を灑て邦家の前途を焦慮したるに至りては決して世外の一閑翁、仙界の隱遁者にあらざりしなり、ア丶海舟先生は何人ぞ其眼爛慈、其腕偉大、其氣卓落として而して光風霽月の心胸能く人々して欽仰措く能はざらしめたり是を以て壯士商人軍人政治屋山師落魄書生より學者紳士に至る迄先生の教を請ふ幾千人、而して嚴本善治氏は先生に私淑したる一人なり其海舟餘波の著は氏が私淑欽慕の餘に成りし者也先つ筆を海舟先生の生活に起して未だ先生に接せざる未面の讀者に先生の風貌を髣髴せしめ是より氏が親しく先生に接して聽取したる談話の筆記を輯集せり嚴本氏の筆は文壇既に定評あり瑯々たる文詞能く海舟先生の風采を想望せしむるに足る想ふに先生の如き決して淺薄單純の人にあらざるべし其の人物の深邃偉大なる容易に端倪するに難きものあらん而して嚴本氏が先生の風貌を髣髴せんと勉めたるもの亦た先生の面目を失はざるべし海舟餘波の書は氷川清話と相對して先生の襟抱を窺ふに足るものあらん。

◎北國新聞（同四月八日）

題して「海舟餘波」といふ、三疊の茶室に天下の豪傑を罵倒せし海舟先生の片言雙語を蒐錄したるもの也、江戶ッ子獨特の快辯術も一語の損する所なく些々たる談片の間能く先生の面目本領を躍如たらしむ之れ著者の先生に親炙して深く先生の衷心を諒するにあらずんば焉んぞ如斯を得べけんや閑談平話一として諷刺ならざるはなく一として實行の議論ならざるはなし上は皇室の事より下は娼者幇間盜賊掏兒の事に至るまで罵詈は其痛所に徹し諧謔は其絕快に及び急喝笑語の間不知不識熱誠の迸るを認む世多く先生の傳記逸事の著を出せども本書の如く巧妙に先生を紹介したるものは多からず書中編を分ちて氷川のおとづれ、清話のしらべ、濤のおとかた、懷舊しなさだめ、希聲大音、破默建言、與康有爲書の七編と爲す。

◎新北陸（同四月九日）

活眼達識能く一世を道破したるものは海舟翁也、半生韜晦徒らに冷罵熱嘲を事としたりと雖ども功名以外自から功名を遺し經營以外自から餘勤の赫灼たるものあり、是れ其の偉人として天下に尊重せられたる所以にあらずや

此書翁が隨時隨處の談片を網羅したるもの、卒然として之を讀むも猶ほ興趣あり、仔細に之を味はゞ一言一句と雖ども悉く是れ天下の大經綸に係るものあり、而して偉人の半面は髣髴として其の間に隱見す、蓋し世の滔々たる傳記若くは言行錄に優ることと固より也、況んや著者能く翁に親事して知己を以て自から許せるに於てをや、此人にして此著をなす、能く翁の言行を寫し得べき也、願ふに洛陽の紙價之れが爲め貴からむか、著者は誰ぞ、女學雜誌の主筆嚴本善治氏也。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

◎救濟新報（同四月十三日、風外

聞く編者巖本善治君は、明治二十年八月始めて海舟翁に見え、爾來翁が永眠の以前に至る迄略十二年間餘、翁を邸に訪ふもの毎週二回若くは三回を缺かず、翁も亦氏の來らざるを佗ぶ、故に到れば閑談、清聽、而も翁は據心の梗概を演べ豈か覆ふ所なかりしと。爰を以て本書に記載する處のもの、凡てこれ此の清韻を去て氏が記臆の草にかゝるものに基き、天眞爛漫、純潔耿介なる翁が濶識より迸發する所の高論卓說、即ち翁が經驗と將た社會の翁に與へ去其反影とに於て、翁の意府を發かしめ、其三寸をなして搖かしめたる、其秘鍵、其機鈴とも云ふ可きを網羅せしものと云ふべし。緒言して曰、應病與藥のものあらんと、然れ共翁や言はんと欲去て排々たり、默さんと欲して憤々たる底の人に非ず、而も度量翁の如く、活識翁の如く、洪智翁の如く、何ぞ其言にして嗒々たらざるものあらんや、君又曰く、同門同信の士と相應酬し、深く先生の餘韻に聞き、偈仰崇拜の學を爲さんと欲するに意あればなりと、以て編者の意想と、この書の眞味とを明かんするに足るべし、何ぞ世人にこの書の一讀すべきことを勸めざらん哉。

◎基督教新聞（同四月十四日）

晩春、百花の紅衰へて細雨、血の如く涙の如し。四月四日、市谷の寓舍に一人兀然として海舟餘波を讀む。菊版二百頁の假綴にして卷頭に、海舟先生の肖像と自筆の文稿とを添ゆ、俱に眞采歷々として神韻人を射る。開卷一章の『氷川のおとづれ』は先生高臥の狀態を詳叙し、二章『清話のしらべ』は、高談清話の餘響を描寫し、三章『波のあさかた』は、維新前後政界の消息を細述し、四章『懷舊のしなさだめ』は、古今人物に對する先生の品評を網羅して詳細緻密、一語は一語より連想を催し、一辭は一辭より聯感を高めて感慨無量。殊に先生の聲調語辭をも併せて描寫しあれば、瞑目之れを誦するに語音琅々として、恰かも膝を接して高談の餘響を耳にするが如し。之れを女學雜誌社中の士に聽くに、著者巖本善治氏は、海舟先生とは親交の人、毎週其門に趨りて清話を聞きつ歸宅の後ち自から筆を把りて、高談の摸樣を筆記せられしとぞ。宜べなるかな、坊間類似の書と其趣を異にせる乎。清話の筆記尚ほ著者の机上に堆を成せりと謂へば吾人は鶴首して『續海舟餘波』の、一日も速かに出梓せられんことを望む。（掬泉居士）。

◎稲音新報（同十四日）

海舟は偉大なる人物なるか、將た斗筲の小人なるか、此は人々の各其の觀る所に由て意見を異にする所なり、海舟餘波は女學雜誌の巖本氏が折ある毎に氷川の邸に訪つれて教を受けし所を歸りて錄したるものなりといへり、海舟果して富士か八島か朝日の如くならば其の餘波も激して磯を打ち岩を嚙まん、彼れ若し此書の表紙にある「舟」の如き三四反の帆にて走る小舟にもあらんには、箔蟹の殼をも動かし得じ、兎にも角にも此書は海舟其人を顯はすものに外ならざれば、讀者得る所あると否とは人々のすき〳〵に由ゝ、

◎大坂毎日新聞（同四月四日）

時艱にして偉人を思ふ是れ編者が敢て之を世に問ひし所以にして曠世の奇傑故海舟先生が口を衝て出づる例の豪放跌宕傍若無人的餘唾を錄したるものなり皆是れ編者が親しく就て教を請ひし所に係り縕因の間溫乎たる先生の清容に接し痛快切實なる話罵の聆くの想あり一たび之を誦せば自ら妙諦の存するを認むべく所謂咳唾皆珠なるもの遺し言ふ者罪なく聞く者以て戒むるに足るもの耶。

◎信濃日報（四月六日

本書は巖本善治氏が去る明治二十年八月初めて海舟勝翁に會してより以來本年一月に至る迄屢次翁を訪ふて翁の音聲に接したる片言隻語悉く筆記して篋底に珍藏せしものを今回翁の登仙に遇ひ深く翁の餘韻に聽き以て同門同信の士と共に偈仰崇神の學を成さんと欲して纂述したるものなり。卷頭翁の寫眞像と并に翁の筆蹟を挿入し次に翁が同氏に對して爲したる大小の談話を揭ぐ讀み去り讀み來て恍として身直ちに翁に接しつゝあるの感あり。

◎佐　賀（同四月七日）

題して海舟餘波と云ふは以て海舟氏の全豹を窺ふ者に非ざるを表する也言ふ先生化動の跡に就いて仔細に研究し同人と共に苦學を重ねんとするの微志なりと著者は明治二十年以來本年薨去の悲報を傳ふるの際に至る迄親しく先生の高談を聞き先生の餘韻に浸染せる者先生の片言隻語は大畧載せて本誌に在り海舟清話と併せて明々誦す可く個々服膺す可き好著述と謂ふ可し著者は女學雜誌主筆巖本善治氏記事の体は概れ先生の口吻に倣ひ最新話談より始めて古きに及ぶ卷頭先づ氷川のおとづれの狀態を描きて海舟伯に髣髴して高話を聞くの思ひあらしめ次に清話のしらべ波のあさかた懷舊しなさだめ等と順序を定め精細記述せり用心の程特に深きを見る。

◎和歌山新報（同四月五日）

斯書は嘗て海舟翁に接交するの深かりし巖本善治氏が翁の清話を記せしものにして一讀其人に接するの感ある時、艱にして世は漸く翁を想ふに至る是書を讀む者唯翁の談片として一讀に附し去らず明治聖代の活例として其の全編の味を咀嚼せば自己を益し亦人を益する大なるべし。

◎靜岡新報（同四月八日）

曩きに女學雜誌に現れしもの今小册子となし、海舟餘波と題す著者の言の如く傳にあらず亦論にあらず

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

所謂先生の餘音なり、余豈先生の餘音として能く評すべきものならんや、余聊知を辱うす今此の著を見轉感慨に堪えず世間此の著を見余と感を同ふする幾人かあらん、卷首に「ほの〲とあかしの浦の朝霧に島かくれゆく舟をしぞ思ふ」と以て編者が意を知るに足れり(二子生)

◎岐阜日々新聞(同四月十六日)

故勝海舟伯の談話等を蒐集したるものにして巖本善治氏の編する所なり勝伯に關する著述尠からずと雖とも蓋し此書の如く眞面目なるは多からず猶ほ細評は精讀の後に讓る。

◎九州新聞(同四月八日)

本書緒言に曰く斯書海舟先生の傳に非ず亦論に非らず云々とかの氷川清話と同一種の冊子にして海舟先生が生前に教へたる奇矯の訓戒微妙に入るものを綴集したるもの卷頭先生の溫乎たる肖像及び活氣潑動せる眞蹟とを挿入して一層の光彩を添ゆ讀來て言々字々眞に先生に親むの思ひあり春當人定る時之に對して偉人を思ふ時意氣自ら爽なるものあらん著者巖本善治氏。

◎弘前新聞(同四月二十六日)

こは生前伯の知遇たりし巖本善治氏の伯の爲又世の爲生平伯に親近して記臆したる談片逸事を集蒐して世に出されたる者なり躰裁閑雅舒事整然故伯の風貌見るが如し蓋し坊間流布する此種の書と撰を異にす。

◎東北民報(同四月六日)

本書は巖本善治氏が故勝伯の生存中親しく聞き得たる種々の高談清話を編纂せしものにて先づ最初に永川邸内の趣を記し次に同伯の起臥應對の模樣を直寫したれば一讀して親しく同伯に接したるの感あらしむ加ふるに躰裁優美高尚なれば机上缺くべからざるの好書なり。

◎峽中日報(同四月十三日)

巖本善治氏の著にして「氷川のおとづれ」「清話のしらべ」「濤のあとかた」「廢藩置縣」「維新後の失策」「遠州金谷ヶ原」「松隈內閣」「懷舊しなさだめ」「希聲大音」「機動勢變」「片々」「破默建言」等の十數章に分ちたり絕大の偉文章はイザ知らず片々たる駄作の山鳥の尾的長々しきに厭きたる讀書眼には此種の單文字こそ恰當ならめ。

◎因伯新聞(同四月十二日)

海舟翁の一代は淸標雅操、獨鶴を人間に立たせ遠韻遐心、孤鴻を天末に翺らすの槪ありき此書は巖本善治氏が親しく翁に就て聞き得たるの談話を筆記したるもの機鋒英發、之を讀む坐ろに海舟其人に接し親しく其の一喝を喫するの感あらしむ卷首には翁の山岡鐵舟を吊する稿本の寫しあり。

◎經濟雜誌(同四月十五日)

巖本善治氏が故海舟先生に親炙して聞かれたる談話を蒐めたる者、坊間已に行はるゝものに比して趣味一段の深きを覺ふ卷首附する所氷川のおとづれ、先生を失ふの嘆の二篇近來の好文字なり。

◎奧羽日々新聞(同四月六日)

巖本善治氏の編にて氷川のおとづれ淸話のしらべ濤のあとかた懷舊しなさだめ希聲大音破默建言等の數項に分ち終りに與康有爲書を載せるあり謹厚緻密の筆にて先生の談話を寫せしもの神采奕々先生と對話するの思あり新聞紙上に顯はれし淸話の鹵莽なるには似るべくもなし。

◎土陽新聞(同四月五日)

本書は東京女學雜誌の主筆巖本善治氏が久しく故海舟先生の謦咳に接し其高論卓說を聞き之を筆して其篋裏に秘藏しありたる者を把つて先生亡するの今日同志と共に其餘韻を尋ね餘風を招かんが爲に特に上せたるものにして卷首に先生の最後の撮影並に遺墨を掲げ序及び先生を失ふの嘆を載せ篇を氷川の訪れ、淸話の調べ明治卅一年二月二十日、同十一月十日、濤のあとかた。廢藩治縣、維新後の失策、遠州金谷ヶ原、松隈內閣、懷舊しなさだめ、希聲大音、道、機動勢變、片々、與康有爲書等の諸篇に分ち先づ氷川邸前の風景より門に入り室に通ずるの有樣など目に睹るが如くに叙し人をして宛然其坐に在りて先生の高談を聞くが如き思あらしめそれより前掲諸篇の談話に移る著者の用意頗る周到なるは讀者の最も感謝する所なり。

◎松江日報(同四月五日)

巖本善治氏の著なり彼の氷川淸話の如し海舟先生の談話を掲げたるものなれども單に談話を掲ぐるを目的としたるに非ず深く寓意の存するものゝ如し他日別に細評するの時あらん。

◎山梨日々新聞(同四月二日)

本書は海舟先生在世の日若者巖本善治氏が每週其門に趨りて淸話を聽き歸りて直に之を筆記したる者なれは海舟先生の氣魄咄々人に逼るものあるを覺ゆ此書の如き即ち海舟先生の談に依つて海舟先生を傳ふる者と云ふべし洛陽の紙價爲めに貴からざるを得ず。

◎時事新報(同四月八日)

巖本善治氏が親しく故勝伯より聽取りし談片を集めたるものにして之を繙けば例の翁が氷川の閑居に坐を構へ嘲罵冷熱を擅にするの狀眼前に髣髴たる心地す。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

◎西肥日報（同四月十二日）

◉海舟餘波　故氷川伯が明治二十年以降の活話機談を集成す所載の話柄は伯が觸目の時感に依るものあり又往事の追想に依るものあり嘗に彷彿裏に伯の人物を認むるの便りあるのみならず其時代の如何を窺ふの料とすべし。

◎新潟新聞（同四月五日）

◎海舟老伯の逝てより既に數旬、千束村の墳塋には花空しく咲き鳥空しく啼き、芙蓉の靨顏、獨り朝な夕な其倒影を墓前の池水に落すあるのみ、

◎巖本善治氏は篤學力行の士なり、先憂後樂、女流の教化に盡瘁する十數年、道學の餘、暇あれば輙ち氷川に趨走せり、毎週一回或は二回、此の如きもの又十餘年、余京に在るの日氏と相識る、頃日自から著はせる『海舟餘波』を贈り來らる、

◎珍袖の好小冊子、總べて百九十五頁、開卷先づ故先生の絕影を揭げ、又先生自から『坊主となりて』引導を渡したる鐵舟の吊文及偈を附錄し全篇を八章に分つ、天地の大より人心の微に至る、言々金石の響あり句々珠璣の光を放つ、

◎『先生を失ふの歎』は『歔欷の聲を聽くが如く『氷川のたさづれ』芝蘭の室に入る心地す、『清話のしらべ』『溜のあさかた』『懷話しなさだめ』『希聲大言』『破默建言』讀むに卷を終るを覺えず、卷尾『與康有爲書』を載す。

●昨夜雨る、幽燈兀坐、眼に倦せて『海舟餘波』を渉獵す、『いろ〳〵研究したが人の心を見て人の心が分つて來たよ、二十兩も懐中してなるとホク〳〵悅んで居るよ』に至て英雄、人心の秘奥を知るの術相一致するものあるに驚く。

◎愛媛新報（同四月十三日）

一世の偉才たりし勝伯が幾多の方面に對つて三寸不爛の舌を動かしたる金言籠めて本編にあり伯を論ぜんと欲せば本書を繙きての後にこそ然るべけれとは著者が言にのみあるまじ。

◎都新聞（同四月七日）

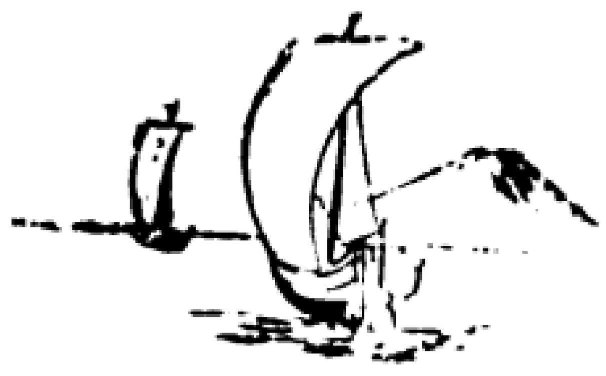
海舟翁去つて既に數月生前に於ける言行錄は天下に愛讀せられて新刊少なからず此書も亦翁の談片と小史傳とを合したるものなり、

◎讀賣新聞（同四月七日）

之れ故海舟老伯の片言隻語を收め其清顏を傳ふるもの、大珠小珠玉盤に落ちて嘈切の聲あり。

◎國民新聞（四月十六日）

巖本君の『海舟餘波』は海舟文學中の逸品に候。卷頭『氷川の音信』は、實に其名に負かず候。先生に親炙するの厚きにあらざるよりは。さても斯く描かる可きものには無之候。或は著者が英雄崇拜病に罹りたるかと、思ふ人も可有之候得共、そは却て親炙の厚き證據に候（東京便り）



一日本教育は學理上實際上諸般の問題を解釋して教育界の一光明たらんとす
一日本教育は不偏不黨獨立不羈の精神を持して大膽に濶歩せんとす
一日本教育は特に倫理教育に力を盡す
一日本教育は學校教育に盡力すると同時に社會教育を宣傳せんとを期す

日本教育 第七號

四月廿日發行

◎論說
◉教育界の新要求　日本教育記者
◉澤柳普通學務局長に與ふるの書　日本教育記者
◉理想論（完）　山中喜一
◉良心の性質を論す　桑木嚴翼
◉倫理實驗界
○倫理教育談　丹所啓行　大東重善
◉史文
◉文章談（時文論家短評）　某博士
◉教育小說 小夜衙　杉谷代水
◉時評
◉文部實權の下移◉教育家としての政治家◉中等教育の不備◉高等師範學校長更迭の風評◉まづ社會的制裁を意識せよ◉教育基金の使途方針◉落花紛々
◉雜錄　數件

●注意　本誌毎月二回發行（五日、廿日）一冊定價六錢郵稅五厘十冊以上拂込の諸君には割引すへし○爲替振込は麴町支局宛の事○郵劵代用一割增

發行所　麴町區麴町二丁目二番地　經世社

チッスフヰールド原著　經世社編輯部翻譯

活用英文典入門

五月上旬刊行

The Parts of Speech.
by J. C. Nesfield. M. A.

本書は目下英語世界に稱讚頗る例のチッスフヰールド氏が英文典叢書の第一篇にして既に其名の示すが如く英文典の初步なる八品詞を簡明に說明せるもの、且つ其翻譯は本社が獨得とする平易と深切とを以てしたれば初學者が座右の伴侶たるは敢て多言を要せず。

經世叢書 第壹篇

世界の厭世觀　全一冊

（五月下旬刊行）

久津見息忠君著

肖像　釋迦　ハルトマン　ショーペンハウエル

厭世的哲學及宗教は、悲慘黯憺なる人世の半面を描ける一種の觀察信仰にして、免る可からざる人世の思想感情なり。此一面の觀察信仰の如何なる眞理を含むかを研究するは、啻に哲學界宗教界に必要なるのみならず、一般人士の爲に必要なりとす。著者茲に見る所あり。世界各國に於ける萬種の厭世的哲學及宗教を觀察して、其精神要旨を述べ其人文史上如何なる價値を有するかを細論精議す。庶幾くは一目の下、世界厭世觀の種々相を達觀するを得んか。從來此類の書學界に乏しく、世は翕然として其渴を醫せんとす。今や此書出でたり、哲學界、宗教界、教育界は勿論其他苟しも人世と學理との如何を知らんとするものは一本を購ふて座頭の師友とせよ

發行元　東京市麴町區麴町二丁目二番地　經世社

巖本善治編

海舟餘波

一冊三十錢　郵稅四錢　郵劵代用三十七錢

海舟先生在世の日、編者毎週其門に趨りて清話を聽き、歸つて直ちに筆記し、一々其眞面目を書留めたる者、今殆んど一堆を成せり。蓋し世上大率ね幕臣の勝安房守を傳えて、偏に其舊功を賛す、素より是れ可ならざるに非すと雖も、先生苦心の存する所、寧ろ其幕府明渡しにあらずして、反て明治新政府の維持建設にあり。但、夫れ先生能く形跡を沒し、功名を讓り、巧に韜晦して擾々の評を避くるの故に、當代多く之を知さる耳。今や先生一去して亦之を秘するの要なし。此書、主として此般の消息を傳ふ。坊閒既に一二の著書あり。略ほ其梗概を言へる者の如きは、此書皆省き、凡そ先生の事業言論にして未曾て世に出てず未曾て世の思到せざる者を輯收す。悉皆編者親しく聞く所にして、毫も他子の文を加へさる也。又別に先生の寫眞を添ゆ。是れ最近の撮影に係り、コロタイプにて製作す、銅版鉛版をもて比す可らす。眞采歷々、光姿爛として面あたり接するが如し、又先生終辭の文稿一篇を寫眞版に附し併て添ゆ。是昔し山岡鐵舟長逝するの日、先生自ら偶を作て弔する者、其辭悲痛、達人知己を惜むの情、流露澎湃す。今ま斧削の痕點々親るべく、眞に一代の珍なり。又康有爲に與ふるの書及び金貨本位制に對するの建白文の如き、眞に先生平常の苦心滲濟たるものを見るべし、併て附錄とす。如今版成り正に發賣す。同好の士希くは一讀を賜へ。

東京巣鴨庚申塚　女學雜誌社
發賣元　東京市神田區表神保町　東京堂

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

明治廿九年三月十九日遞信省認可

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

明治廿五年三月十五日遞信省認可

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY